万象　平成十四年十一月十三日第三種郵便物認可
令和二年十一月一日発行（毎月一回一日発行）
第十九巻　第八号（通巻二二四号）

万象

BANSYO

十一月号

2020. 11

十一月の句

神門のギヤマンの藍しぐれけり

岩崎眉乃

神門は、金沢のシンボル、尾山神社の神門のことである。

この三層の楼門造りは、神門としては珍しい和洋折衷様式で、最上層の窓にはめこまれた、五色のギヤマンがとくに有名。百三十年程経ったいまでも目をみはらせる。

時雨がさっとひと走り過ぎ、仰ぎ見たギヤマンのラピスラズリ色の藍に心がうばわれたのである。

五色のギヤマンの、ことに藍に焦点を絞り、簡潔に流れるように詠んだ感性の一句。

（伊藤美音子）

万象

BANSYO

令和二年
十一月号

変えられぬものを受け入れる冷静さを
変えられるものを変える勇気を
そして　両者を識別する知恵を与えたまえ

（ラインホールド・ニーバー）

万　象

令和２年11月号

主宰作品　白　雨……内海　良太　4
副主宰作品　秋の蜂……小林　愛子　5

風音集

……飛高隆夫・江見悦子・柳澤宗正・山田春生・福島せいぎ・内藤恵子　6

続・万象と共に㊼　俳人と絵画……内海　良太　8

同人作品

内海良太選……9

同人作品の佳句……内海　良太　31

新同人発表……32
新同人への祝辞と激励……内海　良太　32
新同人からの自己紹介……33

同人特別作品
天に近づく……大村　峰子　38
ふるる里……福島　吉美　39

飛高隆夫自選句鑑賞⑲
散るものは散りてしまひて冬青空……森　和子　40
與重郎芭蕉義仲さみだるる……喜多尾明子　40

万象ホームページ　http://www.bansyo.com

福島せいぎ・内藤恵子自選句鑑賞⑦

この月のどこかにいくさはじまりし　せいぎ・・・・・・・・・・・・・・・・・・田中　幹也　41
藪からしの花にも色みかん色　恵子・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・伊川　玉子　41

特別作品評（九月号）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・榎本　文代　43

同人作品評（九月号）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・林　陽子　44

万象招待席　江戸古地図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・中嶋　久登　46
　　青葉木菟・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・本多ひとみ　47

万象ノオト「櫛」・・・・・・・・・・・・・八代洋子、小板橋泰山、横山ユキ子、米田敏子、三村紀子、島野ひさ　48

俳書探訪・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・曽根　満　50

万象作品　飛高隆夫選・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51

万象基金のご報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・65

万象作品の佳句・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・飛高　隆夫　66

同人会便り　第三回中山純子記念俳句賞作品募集／珈琲ぶれいく⑥・・・・・・・・68

「万象」中央句会報（八月例会に替えて通信句会）・・・・・・・・・・・・・・・・69

「万象」同人句会報（八月例会に替えて通信句会）・・・・・・・・・・・・・・・・71

東西南北・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・74

「万象」紙上全国俳句大会投句用紙・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・77

〈表紙イラスト〉永井もりいち　〈カット〉佐藤雄二

白雨

内海良太（主宰）

密に咲き密に零るる花卯木

唐黍の粒の律儀に並びをり

尼寺の尼が突ける蜘蛛の網

にぎやかに白雨走り来走り去る

僧若し大き西瓜を風呂敷に

秋立つや土手に土嚢の新しく

鳩居堂に秋の一箋買ひしのみ

秋の蜂

小林愛子
（副主宰）

籠り居も長しごきぶり滅多打ち

鬼百合の咲いて仏に逢ひにゆく

雨雲のいつしか合歓の花の上

待つといふ力溜まりて蟻地獄

巣を突けば金色に散る秋の蜂

死なばごみ生きて地を這ふ秋の蜂

敗戦忌空は極みの青見する

風音集

合歓の花

飛高隆夫
（万象作品選者）

合歓の花なだるる谷や能登半島
灼けてなほ舞ひ継ぐ蝶の真昼かな
日盛とふ言葉が好きでありし頃
妻とわれ老い諾へり大夕焼
夏逝くや回転木馬役終へて
行く雲のふえて九月となりにけり

秋の浜

江見悦子
（編集人）

鮎跳ねる錦玉羹の小宇宙
桔梗の一つ大きく溶岩の陰
束ねられ香を零しけりラベンダー
正面は富士や太宰の部屋涼し
仙翁花風吹き抜くる峠茶屋
足裏の砂くづれゆく秋の浜

曝書

柳澤宗正
（同人会会長）

水掬ひひらりと返す夏燕
吹き抜けの風の涼しき新庁舎
白シャツの脚のまぶしき女子高生
苔茂る樟の木立となりにけり
出くはして上目遣ひの蜥蜴の子
来し方に思ひ馳せつつ書を曝す

赤のまま

山田春生（顧問）

家中の窓開け放つ今朝の秋
石蹴りの石のとびくる夕化粧
落城の遺跡の濠や赤のまま
ひぐらしや子らのにぎりし泥饅頭
コスモスの揺れて顔だす観世音
荒凡夫兜太出て来い曼珠沙華

夏終る

福島せいぎ（顧問）

宿主てふ蛇に遭はざり夏終る
踊りなき街にひぐらし合奏す
白桃の好きな父あり寺継がず
新藷を仏の母に蒸しけり
ステテコや赤鉛筆の折れ易き
魂のさまよふ墓を洗ひけり

青どんぐり

内藤恵子（顧問）

武蔵野や青どんぐりの散らばれる
緋目高の雨よろこんで集まれり
生れたての蟬空蟬に触れてゐし
蟬時雨分けてみんみんしぐれかな
若葉風猿山に音なかりけり
風死んで影のぴりりとしてゐたり

原田しずえ顧問は体調不良のため欠詠となりました。

続・万象と共に ㊼

俳人と絵画

内海良太

「万象」の同人・会員に絵を描く人が多い。

片桐帆一さん（船橋・同人）のカットは三年間「万象」誌を飾ってくれていた。帆一さんの本領は油彩画で、毎年百号の絵を美術協会の「純展」や市の美術展に出品し、いつも句会仲間が鑑賞を楽しみにしている。今年は全て中止となってしまったが、それでも自宅のアトリエでの創作は怠りないようだ。

佐藤雄二さん（新潟・同人）には、新潟の一美会・油絵作品展での優秀作品を、今年の「万象」の7月号から毎月裏表紙を飾っていただいている。

コロナ禍の鬱陶しい気分は、雄二さんの明るい爽やかな絵に癒やされる。雄二さんは 版画作品も一級品で、そのうち「万象」誌を飾ってくれるだろう。

「風」時代の沢木欣一先生は時々自宅の庭の花や草木を描いていた。先生の第12句集の『綾子の手』には、庭で剪った薔薇をご自分でスケッチして口絵にしている。これから開こうとする薔薇は生動感があり、写生的な筆遣いを感じる。

先生は子供のころから、絵画に関心を持ち、上野の美術学校（現東京芸大）を志し絵画教室に通ったこともあったという。

先生の随筆集『俳の風景』には古九谷染め付けの徳利や水差のカットを描き、また細見綾子の随筆集『花の色』の箱の絵に桐の花を描いて構図と彩色が美しい。

正岡子規は子供の時から絵に興味をもっていたが、本気で描いたのは、亡くなる3年程前だった。明治32年の秋、体調がややよくなった日、机の上に活けてある秋海棠を見て急に絵具を取り出して秋海棠を写生した。これが子規の描いた水彩画の第一号で、絵の左端に「コレハ生レテ始メテ絵ノ具ヲツカヒシ画ニテ候」と書いてある。

子規は根岸に住んでから、画家との交流が始まり、本格的な画論を学んだ。画の先生は浅井忠、小山正太郎、その門の中村不折、下村為山で、明治期の西洋画の錚錚たるメンバーが師であった。写生の説もここから始まった。

同人作品

内海良太選

○は佳句に選ばれました。

札幌　松原智津子

伏流の水音優し花葵
独り居の鰻重先づは仏前に
鹿肉のカレーを食ひし暑気払ひ
ガラス吹く入墨の腕汗まみれ
探し物やうやく見付け髪洗ふ

札幌　岡本敬子

靴紐を締めてくだれる渓若葉
ほたるの川昼は青蘆そよぐだけ
翡翠や藻の色の波よす岸辺
蒲の穂や貨車が駅舎の無人駅
磔像の痩躯秋立つ風を着て

札幌　濵谷和代

濃き淡き山の膨らみ茂りかな
弧を描くホースの水に生るる虹
樹のあはひ大き蜘蛛の囲銀の雨
灯籠のほのかな明かり夕涼み
○切るほどに小さくなりし秋の薔薇

札幌　大内和憲

廃鉱の闇より声や麦藁帽

仄青き坑道の灯の涼しさよ
炎昼の日をはね返す採石泥
底紅や暮色まみれの花を閉づ
茸狩の息荒らげて戻りけり

札幌　紅露恵子

さはさはと簾の影や頁繰る
○昼の月昇る速さや日の盛り
昼顔の蔓バラストを這ふばかり
群れとんぼ海の青より生るるかも
湾岸に風車林立虫すだく

札幌　大内マキ子

夏萩の咲きてはこぼる日を重ね
蜻蛉群れ木の間木の間の空の碧
若き日に還る面影夏帽子
勤行の涼しき声や大欅
鮭還り水のしらべの高まりぬ

札幌　落合裕子

子の家の朝餉郭公聴きながら
日差し濃き菩提樹の花匂ふ道
えぞ松を我が物顔に蔓紫陽花
苔そつと拭ひて夫の墓洗ふ
解体の鉄筋あらは終戦日

江別　佐藤哲

万緑の林に熊の出るはなし
地下街に空を探すか白き蝶
放牧の牛と目の会ふ草いきれ
盂蘭盆や牛舎の真昼音もなし
○萱草咲く原野のま昼人恋し
西日射す子供の部屋や鳥帰る

苫小牧　林陽子

ベランダに女郎蜘蛛居る日の憂鬱
仏壇に程好き風と盆用意
○枕辺に『少年と犬』星月夜
鴨の水尾水引草の岸に寄す
うすうすと噴煙まじる鰯雲

秋田　小松敏郎

盆墓の深き戒名毛虫這ふ
義兄逝き三月過ぎたり盆の月
川越えて山にかかれる虹の橋
栗落ちて葉を突き抜くる音浅し

雨上り泥湯の里は爽やかに

新潟　佐藤雄二

深梅雨や土鳩啼き出づ午前五時
甚平着て今日三度目の探しもの
睡る子に明滅しきり螢籠
万代橋の歩数たしかむ夏帽子
甚平や老いまざまざと臑にあり

新潟　髙橋ひろ

弓弦を張りたるやうに蜘蛛の糸
○もう家へ帰る草笛捨てにけり
海の生む汚れなき風涼あらた
草市や股座に花桶を据ゑ
朝風を秋めくとふと思ひけり

南魚沼　森山暁湖

熟寝して体の軽き今朝の秋
○尺蠖に計られてゐる肩の幅
軒に吊る屋号名しるき盆提灯
凜然と梅雨雲払ふ八海山
陽炎をつれて電車の過ぎにけり
沈床を踏んまへて釣る柳鮠

益子　光岡れい子

蟬時雨疫病払ふ神事かな
月見草引き込み線の錆赤し
夕風の湧きて稲の香かすかなる
露草のしづくのままを厨窓
ゆく夏や畑にころがる草ロール

芳賀　大村かし子

門柱をがんじがらめの凌霄花
枝払ふ隣と隣透けて見ゆ
まだいける土用鰻を一人前
○送り火の草の匂と混じりたる
校庭に落せし涙終戦日

宇都宮　阿久津勝利

河口まで蛇行の光り梅雨の明
蛇苺気怠い午後の堰の音
残鶯の木立抜け来る雲巌寺
滝壺へ白一色の水の音
駄菓子屋の婆が売り出すかぶと虫

栃木　上岡佳子

○夕散歩膝下ばかりを行くとんぼ

まだ生命在るやの構へ蟬の殻
デザートは加賀の葛切り夫癒えて
八月や樟の押し上ぐ月朱し
星涼し浄土の華となりし師よ

佐野　亀田やす子

身幅なる茶室の門や杜鵑草
○星砂のやうなる稲の花ひらひら
夕さりの橋に色なき風の過ぐ
夕蜩呼応してゐる藪の奥
朝刊を取る手に響く威し銃

佐野　増田幸子

青しぐれ音なく濡るる寝釈迦かな
○朝涼にやうやく寝入る自儘かな
対岸のとりわけ高き百日紅
晩夏光ホルンを復習ふ女高生
棚経の僧の辞したるはやきこと

佐野　加藤季代

サングラスはづして閻魔堂の閻
盆用意朝の血圧正常値
○八月の記憶のひとつ塩むすび
秋風の見えてゐるなり木々の梢
木洩れ日といへども強し秋乾き

佐野　鍋島広子

盆僧の俳話を坐して聞きゐたり
露草や腹に蟬浮く布袋像
池巡る百日紅の花の屑
小判草ジャズを流せる天丼屋
遅き梅雨明け草木を眩しめり

佐野　阿部澄

蚊遣焚き窓開きある句会場
芝刈りの後の夕風匂ひけり
野球部の大き円陣朝ぐもり
すいつちよのジャンプ何度も草深く
閉院の知らせの電話夏終る

佐野　芝宮留美子

おはぐろや門川少し濁りたる
門川に靡く水草の涼気かな
○木患子の青実明るき夏の雨
深煎りの珈琲とジャズ額の花
日は高しそよりともせぬ青芒

佐野　島田和枝

蝸牛散歩の目標一万歩
鋏立て沢蟹過る裏参道

○梅雨茸芝生の庭に傘を解く
月下美人自粛々々の雨の夜
長き雨上る八月白き雲

佐野　茂木弘子

湧き水を汲む下闇の巌かな
すれ違ふ僧侶は低く黒日傘

○一斉にされど静かに竹落葉
百日紅幹の曲りを水陽炎
月見草夫の日数を追ふやうに

悼　駒形祐右子さん

足利　大木茂

秋近し破堤の跡の癒え難く
風涼し番所の跡のお辞儀石
萩を挿す九尺二間の女中部屋
赤とんぼ湖の向うに榛名富士
湯を流す蘆花逗留の街涼し

土浦　澤照枝

去ぬ燕遺跡に残る塩焼炉
朝まだき里山起す威銃
円墳の一樹ひぐらし鳴きつづく
蔵出しの古器の湿りや盆支度
蓮の葉をお盆に供物たんと盛る

さいたま　山本右近

古絵図の城よりこぼれ落ちし紙魚
夕焼の余熱をまとふ原爆碑
とうすみの影より淡き翅でとぶ
雲を脱ぐ月そのままに衣被
稲田に波起こして真夜の電車過ぐ

志木　中村千久

風ばかり捕らへて走る捕虫網
巌を飛びしぶきとなりぬ裸の子
掃き終へて四角となりし夏座敷
鉄塔を熔かしてゐたり大西日
耐へがたきを耐へて八月十五日

所沢　三好かほる

ほろ苦き鮎のつくだ煮父の忌に
捕虫網子の後につく父のゐて
新涼や畝立て終へし野菜畑

かなかなや影の生まるるすべり台
竹藪の高きを占めて葛の花

所沢　森岡恵子

賑やかに紅ひらき初む百日紅
梅雨晴間むら雲に透く空青し
高みよりかろやかに舞ふ竹落葉
茂りより茂りへつづく錆レール
青芒さやぐ入り日は遠山に

所沢　南雲秀子

参道をよぎる鼠や梅雨の明け
弓なりに毛虫反りゐる檸檬の木
葛餅の蜜の多めが夫好み
子等の声ひびく渓谷蟬しぐれ
照り降りに山百合香る奥武蔵

入間　山口素基

風鈴の音をぼんやり昼寝覚
晩夏光雑誌の端に句を記し
俳人になりきつてゐるちよんぎいす
八月八日八時八分蟬のこゑ
立秋や月のあかるき畝傍山

千葉　田中道江

浜木綿や汀女の句碑に草の丈
またたびの花も葉裏も谿深く
夕焼が空の根元に始まれり
○ハイカーのひとりおくるる岩清水
沈むとき命みづいろ大くらげ

酒々井　竹澤竹里

梅雨明けや溶岩の洞窟光苔
檀林の食堂跡や稲の花
○そよそよと粒の数だけ稲の花
町衆は鎌輪奴浴衣着流せり
みんみんは七日の命蟻が引く

酒々井　中嶋久登

凌霄も牛小屋も消え夏の草
公園の日暮に集ひ力む蟬
今映す川に過去あり広島忌
十一時二分の鐘や長崎忌
滝壺に顔つけそつと底景色

佐倉　内海保子

戦争の夢が続いて明易し

水打てば四つ目垣より蜆蝶
玉あぢさゐ玉のまま枯れ古墳口
梨棚をくぐれば顔に蟬の尿
沼の葦そよりともせず秋立てり

佐倉　大内佐奈枝

満水のダムのさざ波合歓の花
水を打つ節を揃へし竹の垣
八月や平和のための戦争展
手づくりの野菜採り溜め盆用意
青々と初穂の出でし門田かな

佐倉　三屋英俊

蟻登る刑場跡の南無妙碑
日に染まる茜の沼や蛇の首
八月や応召の犬帰還せず
みんみんや並ぶ軍犬軍馬の碑
真菰馬吊す火伏の札の脇

佐倉　横川良子

かなかなや不要不急の旅鞄
澄みのぼる月を映して沼平ら
三尺の橋も水漬くや梅雨出水
宿坊の塵ひとつ無き今朝の秋
一輌のローカル線や花野行

四街道　奥太雅

電柱に浸水記録半夏雨
垣越えてへくそかづらの花あまた
梅雨茸の傘を食みをりだんご虫
葭切の声に目覚むる暮しかな
暗雲にかなかなの声沸き上る

四街道　塗木翠雲

グラジオラス活けて華やぐ仏の間
梅雨湿る土俵の砂を丸く掃く
地下壕に朽ちゆく兜敗戦忌
核開発進む乱世や茄子の花
「被爆地は最後にせえ」と長崎忌

船橋　山下良江

どくだみの無言の勢ひあといふ間
鳥声も風音も失せ青葉寒
雨粒のきらめく蜘蛛の囲花のごと
庭師にはこれは剪らぬと柚子の花
草取りの思はぬ収穫花茗荷

船橋　大山春江

隙間なく浮葉かさなる池靜か
灸花の匂ひしばらく掌に
○ゆさゆさと風の重たき百日紅
水底の小石耀ふ秋の声
丁寧に米磨ぐ夕べ終戦日

船橋　赤堀洋子

○蟬の羽化静かに進む月あかり
子規一派住みしてふ町芙蓉咲く
川とんぼ翅四枚にして翔てり
色も香も放つは雄蕊合歓の花
夕暮や庭に茗荷の花明り
風蘭のかをり仏間にしばし措く

船橋　久保村淑子

コロナ禍の未明の祈り原爆忌
水浴する女のうぶ毛ルノワール
一瞬のほこり臭して白雨かな
青田原一筋の川つらぬける
夕顔の白き闇なる空家かな

船橋　片桐帆一

棚杭に掛けし如雨露や草いきれ
夜濯の空に椋鳥靜もらず
から松の秋は信濃に迷ひなし
盆花に摘みし野の花合せ添へ
四五本のゑのころ瓶に母想ふ

船橋　宮本加津代

むらさきの一輪といふ涼しさよ
きつね雨通り過ぎたる草いきれ
すがりたる葉ごとを摘めり蝸牛
雲の峰帽子は塩を噴きにけり
捩れたる幹の樹齢や花柘榴

柏　山本とく江

七変化尽して終のみどり色
菩提子や沓脱石にハイヒール
換気する窓かなかなの一頻り
木曽馬の嘶き一つ蕎麦の花
幾重にも積み上ぐ廃車秋暑し

柏　松原三枝子

蟬鳴くや雲間の日差し洩るる時

外灯に白さるすべりなほ白し
広島忌わが人生も七十五年
身のうちの痛みの消ゆるつゆの明
病癒えホース高々水を撒く

柏　内田郁代

万緑へ突つ込んでゆく峠越
啞蟬のとび立つ音の激しかり
満開の合歓にやさしき沼の風
八月や年に一度の幽霊図
青胡桃たわたわ松虫寺の前

柏　古川京子

荒梅雨や路地ごとたがふ風の音
白南風や洗へるものをみな洗ひ
朝涼し将門寺の鐘ひびき
月下美人見て観音の夢を見て
広島忌ごつくんと呑む富士山の水

流山　沢辺たけし

夏の月隠して雲のふち朱し
相生橋の途中折れ行く広島忌
桔梗や暗がり坂に朝日差す
菩提樹の翳に青苔純子句碑
ニーニージージーミンミン皆鳴く原爆忌
○新しき靴や青葉の古道ゆく

流山　穂苅照子

○みんみんの声雨雲をほどきたり
老鶯や雨の香強き石畳
八月や皺深くして象歩む
尖りたる蓮の莟と祈りの手
水音や桔梗藍を深めたり

芭蕉子規通かなり

浦安　田中幹也

黙示録読み了ふしじま虫鳴けり
水団を楽しむふたりちんぐるま
兵の雄叫びのごとほととぎす
法師蟬競ふ表と勝手口
急行をやり過ごす駅雪加鳴く

東京　谷田部栄

竹林の葉ずれのさやぎ涼新た
水切りの向う岸まで飛んで夏
コスモスやひとりで通ふ幼稚園
白樺の白のきはだつ夏木立

そのうちと言はれ沙汰なし秋立てり

東京　須賀允子

病室に秋の蚊一匹漂へり
旧盆や夢の父母笑顔なる
十六夜や五十で逝きし父恋し
秋の雷去りたる後の空の紺
学校のチャイム軽やか涼新た

東京　名和政代

大甕の床下涼し能舞台
花街に海老フライ買ふ八月尽
鉄骨をむき出すドック稲光
尾花蛸蠟の明石へ逃げ出せり
菩提樹の花の盛りやダムの村

東京　山本絢子

はらからを偲ぶ八月終戦日
百歳の馬に揺られて夏木立
また一人寫眞の増えて盆供養
牛小屋に出入り自在や夏つばめ
忠魂碑尋ね尋ねて夏野ゆく

東京　藤田裕子

籠り居に本の増えゆく我鬼忌かな
恥づかしくやがて図太くサングラス
木斛の土用芽そろひ靖国社
一分の黙祷短し長崎忌
人混みの中に安らぎ薄暑かな

東京　赤松郁代

大岩に逆さ流木出水跡
滑り台すべり下りたり梅雨鴉
降り出しの雨の水輪をあめんぼう
○泳ぎつつ米寿の背ナを裏返す
炎天を来て真先にマスク取る
亡き夫の誕生祝ふ胡蝶蘭

東京　島野ひさ

父の樹や今年も同じ蟬時雨
炎昼のラヂオ八月十五日
父母も逝き弟も逝きてねむの花
○疏開地の星飛ぶ日々や母恋し
灯を消して見上ぐ湖畔の天の川

東京　佐藤晴子

初蟬や待ちしこの日の空青き
山百合の香に包まるる旅の宿
蟻のぼる目鼻くぼみし辻仏
母の文読み返しをり盆の月
浜風にゆらぐ迎へ火能登恋し

東京　加賀葉子

散る槐地に弾む花ひとつあり
鬼灯や赤を待たずに枯れはじめ
蜩や闇の深まる土の牢
お狐様に空蟬の点朱の鳥居
○壱岐国の墓は金文字送りまぜ

東京　久留島規子

夕さりの塒となりて夏木立
秋立つや小振りに結ぶ加薬飯
夜更けまで姉と墓参の話など
やはらかき穂のあをあをとねこじやらし
ひんやりと掌に落鮎のぬめりかな

東京　下嶽孝一

ひと描きの川は藍色夏のれん
残照の富士をはるかに菊挿芽
万緑や紐のやうなる杣の径
駄菓子屋に「子つばめ育て」てふ掲示
広島のけふの青空赤とんぼ

東京　杉浦一子

露草や朝は蕾の藍を解く
茄子の馬ふたつ並びて夫と犬
親か子かわからぬまでに帰燕かな
○大文字闇より浮かび消えて闇
虫の声心地好く聞く寝入り端

小平　吉村光子

里の夏降るやうな星ただ見詰む
螢舞ふ水辺から空連なつて
研究の芽育てよ伸びよ夏休
焼芋が馳走の記憶終戦日
実生の枇杷小振りなれども味の佳し

立川　疋田華子

屋敷神鳥居ボロボロ百日紅
脇本陣雀のチュチュと涼新た
鬼やんま翅光らせて水叩く

生垣の色ととのはぬ零余子摘む
朝霧の晴るる御嶽山嶺二つ

町田　吉中愛子

裏山を噛みつくショベル大暑かな
鋸に吸ひ付く木屑朝曇
切れ切れの薄雲寄せて夏の月
山水に押され通しの花山葵
桃を剝く被爆七十五年の手

町田　広瀬俊雄

結界の縄を張りたる茸山
新涼や青木ヶ原の洞深し
校庭に谷村城址や病葉散る
○夏芝や飛石ふんで桃林軒
鮎跳ぬる青き流れの桂川
古代米黒き稲穂の天を突く

町田　桔梗純

炎天や広島の鐘殷々と
出番なき水着収むる残暑かな
寒蟬や棚の画集は無言館
花送る姉の新盆里遠し
ブルーベリー摘まるる頃よ秋暑なほ

日野　喜多尾明子

薪能果てて梢の星移る
スマートフォンに青の点滅熱帯夜
小津映画観終へ涼しく眠りけり
透かしつつ眼鏡を拭ふ今朝の秋
初秋の窓辺に木椅子ひとつ寄せ

青梅　小林珠江

トタン屋根打ち抜くばかりはたた神
○秋暑し音に遅れて貨車の発つ
張りたての床に大工の昼寝かな
熔岩濡れてひそと駒草寄り添へり
秋来ると思へば軽き膝小僧

横浜　榎本文代

くちなはを見たる日赤き月上がる
空蟬の夕日の壁にすがりたる
日焼子の素直に伸びし手足かな
校庭の白線うすれゆく晩夏
○鉢植ゑに水たつぷりと原爆忌
マスク縫ひ籠りゐし夏終りけり

横浜　西本才子

ジョギングの乳房をどれり青田風
百年の銭湯閉ざす今朝の秋
炎昼や裏のポストへマスクして
一輪車の少女をよぎり赤蜻蛉
コロナ禍に堪へて迎ふる終戰日

横浜　川越昭子

茗荷咲く雨の黒土はね上げて
天然の氷とり出す氷室より
吾立ちし真鶴岬笹子鳴く
風荒き藪に小綬鶏鳴き止まず
赤き実の枸杞の入りたるかき氷

横浜　大橋雅子

生れたての縮める羽の蟬に雨
○零れさうで舞ひ戻る露蓮大葉
粛粛と鐘鳴る黙祷長崎忌
絶え間なく献水空へ長崎忌
通信士の戦死の叔父よ敗戦忌

横浜　山崎郁子

料亭の庭の流れも柿田川
鳴き声に目覚むる真夜の時鳥
いと小さき栄螺岩間に返しけり
沈没船海峡埋み夏の逝く
夏の波舳先に魚雷見張りゐし

横浜　田賀楳恵

もてなしは一輪挿しの花木槿
ひぐらしのこゑ透き通る夕べかな
○こほろぎやこのごろ物の影の濃し
雨粒の残りし竿に塩蜻蛉
庭石に亡夫居るやうな星月夜

川崎　山口千代子

もみぢ手を合はせて共に盆燈籠
吊鐘の真下広ごる蟻地獄
○菊武者の遥かに望む筑波山
川の中の石を伝ふる涼やかに
濁りなき空もらひける秋暑かな

川崎　大久保進

聞き役の米寿の母や夏座敷
暗転の空を一太刀はたた神
持ち替へて豪気の風を古団扇

走り根の荒ぶる大樹雲の峰
波さらふ足裏の砂や夏の果

鎌倉　恒川清爾

五月雨の余りに多き最上川
蔓薔薇やつひにせざりしプロポーズ
コロナ禍に茅の輪を四度廻りけり
○黒き雨今も目蓋に原爆忌
田に残る父母の墓天の川

横須賀　織田みさゑ

放浪のきざしも見ゆる雲の峰
盆僧の若輩なれど経見事
坐るのも立つのも気合猛暑なる
土用太郎睨みきかせて鬼瓦
沙羅双樹しきりに恋し母の顔

茅ヶ崎　三澤治子

渚まで少し坂道揚ひばり
「お帰り」と母が迎へし夏の夢
母あらばさぞや忙しき更衣
○緋の牡丹色の重さに乱れ落つ
湘南の海に星降る涼しさよ

伊勢原　佐藤和子

病む姉に小玉西瓜を切り分けて
一山の割れんばかりよ法師蟬
青みかん相模の海の透けて見ゆ
鰡飛んで河口間近き相模川
海光や真鶴岬の茱萸熟るる

秦野　佐藤嘉洋

阿夫利嶺を仰ぐ土塁や祈雨の堀
梅雨明けの兆し厨の明り窓
長梅雨の筧の水車良く回り
かなかなやひんやり昏き杉林
登り来て源流の滝しぶき浴ぶ

松本　中條今日子

颱風の来たるや小きざみ釘の音
夜相撲や笑ひの絶えぬ五人抜き
正座して月を眺めてゐたりけり
山鳩の声を包みて袋掛
山の風松の音して象山忌
○山国にて炭ふんだんに山女焼く

富士　神田美穂子

泡ひとつ吐いて開くや水中花
潮入りに藻屑漂ふ土用入
甘藷焼酎半農半漁の村に老い
指涼し弥勒菩薩の半跏趺坐
神楽坂の路地に銭湯浮いてこい
○烏瓜闇におどろの花白し

静岡　大村峰子

○寒蟬のかすかなる朝宮を掃く
梅雨しとど赤松の幹赤くして
夕かなかなぎぎぎと言うてそれつきり
へくそかづら延びるにまかせ老二人
起こしやれば玉虫ぢぢと礼を述ぶ

静岡　海野みち子

新盆の遺影にやんまホバリング
○早よ来よと足長くせり瓜の馬
門火焚く吾に煙の纏ひつく
七夕竹疫病去れと文字太く
木槿咲くダム湖見下ろす夫婦句碑

静岡　宮崎知恵美

荒梅雨や湯治の婆の艶話
踏み石に角を出しをりかたつむり
訓練のヘリ掻き回す梅雨の空
蛇逃ぐる足のありそな速さなり
一歩寄り目に明るかり花おくら

静岡　長島操

木棚を渡る子猿よ青葉風
隣より届く忌明けの葛饅頭
病む姉の好む桑の実摘みにけり
黒雲に追ひ付かれたり梅雨の月
一斉に親へ嘴向け燕の子

静岡　岩﨑武士

蟻の列小さな影も列となり
登山道岩にペンキの道しるべ
炎昼や日差しを睨む鬼瓦
○夕暮の水のこゑきく橋涼み
すいとんの夕餉八月十五日

静岡　曽根満

草取女屈めば乳房地に触れむ

夜濯や萱の匂へる兜屋根

○水の星とてこの出水許さざる

荒梅雨や方舟となる大八洲

緑蔭に入り言の葉の平らなる

静岡　藤原千代子

相席のひろぐる扇青海波

雨乞の禰宜に倣ふや深き辞儀

茶の畝のみどり涼しき農家カフェ

子子に竹の切口てふ宇宙

大夕焼富士を片方に追ひやれり

静岡　荻野加壽子

一畳にをさまりきらぬ昼寝の子

○ゴーギャンの女の仕草サンドレス

音も無く降り出す雨や青山椒

折鶴の黙の嘴原爆忌

原爆忌ムンクの絵めく夕焼雲

静岡　小川明美

茶工場の軒に玉葱吊られをり

五月闇猪の気配に息を呑む

背負籠に小昼の菓子と蚊遣香

玄関に農夫大の字梅雨の晴

ペタンクの球のどすんと地球朱夏

静岡　藤本節子

昼寝覚涙の跡をそのままに

腐草螢向うの山に星一つ

雷鳴や雨の軍団引き連れて

笊の目に染むるくれなゐ梅を干す

○潮騒の届く産院ねむの花

静岡　大長文昭

巌のむ怒濤八月十五日

依代の石に声なき敗戦忌

ねぶの花金掘衆の通ひ径

芸大のフェンスの屁糞葛かな

坂がかる紙漉き村や梅雨ごもり

静岡　加山ひさ子

木木騒ぐ腐草螢となる夜かな

老鶯に山気いよいよ濃くなれり

朝顔や井戸端会議すり抜けて

朝影を抱へて開く蓮の花

○大富士の風の煽れる着莫蓙かな

静岡　吉野美智子

藻の花へ湧水砂を吐き続け
奥宮の辺りかまはず梅雨菌
曝す書に夫の転勤辞令かな
まくなぎをぺつと吐き出し歩き出す
干梅や目覚めに匂ふ夜の家

静岡　石川裕子

指しやぶり止まぬ赤子の昼寝かな
目覚し時計止めて二度寝や朝ぐもり
絵団扇の赤黒金魚泳ぎをり
アイスコーヒー淹れ妹の忌を修す
こぼれ種なれど大輪牽牛花

静岡　望月敏男

梅雨雲や吃水深きコンテナ船
放浪記読むや紫陽花色深む
遠雷や華北に逝きし兵の句碑
吊り橋の我を呑みさう出水川
水切つてシャツ干してゐる素足かな

富山　若島久清

蜂が刺し利き腕一時しびれたり
梅雨明けを待ちつつあるじ毛針組む
吊り下げて橋に投網の夜干しかな
絵屏風の倉へ土用の風入れす
盆近し石屋が石に文字刻む

射水　成瀬真紀子

荒梅雨や艶を深めて純子句碑
純子忌や四方に垂るる青胡桃
半日の日射に消ゆる梅雨茸
籐椅子に父亡き後の月日あり
師のしたるやうに拝み清水飲む

金沢　岸川素粒子

俗が撞く鐘より毛虫こぼれけり
仮の世を生き過ぎし身の更衣
みごもりの軽き羞ひサングラス
眞の闇秘めて涼しき天の川
○空蟬や人間（じんかん）虚実混沌と
アルバムを膝に遠眼の夏羽織

金沢　田村愛子

父を知る人に会ひたり墓参り
純子亡き庭時鳥草咲き満ちて

篁に一ト日風ある酷暑かな
休め田も照らし過ぎゆく虫送り
夏草に埋もれて水夫の墓数基

金沢　井村和子

薄衣の師（桃子忌二句）の手のぬくみ忘れまじ
夜遊びの穀象追ひし師の小声
母の許多弁となりぬ渋団扇
夢に立つ母の繰り言蚊帳初め
鳥籠に小うさぎ飼へり夏休み

金沢　中條睦子

川音の背戸より昏るる盆の寺
簀戸よりの庭のみどりや斎の膳
黴の戸の建てつけ直す鉋かな
手の届くところに団扇どぢやう焼く
また一人鬼籍に加へ秋の風

金沢　今越みち子

夏マスク鼠多門の木の香透く
草茂る先頭の子がたもを振り
未草すべて閉ぢたり昆虫館
早稲の香や茶房のやうな駐在所
冷房や湯気立つ熱き物を食ぶ

金沢　伊川玉子

夏の雲のんどをあげて峡の鶏
蟬盛ん午後の日を背に翁塚
芳名の墨たつぷりと堂涼し
秋の蚊や引き戸重たき閻魔堂
○蓮の花ゆらして過ぐる七尾線

金沢　伊藤美音子

万緑や弓引き絞る力瘤
風紋の綾の起伏や浜豌豆
師に捧ぐ水のかをりの白はちす
○向日葵の黄に染まるほど立ち話
浦風や己が影ふみ大根蒔く

金沢　高田たみ子

夏場所やまはしを叩く音ひびく
噴水の風にまかする息づかひ
芭蕉翁越えし峠や新樹光
風呂敷の唐草模様捨案山子
コロナ禍も歴史をつなぐ大文字

金沢　後藤桂子

今朝の秋音を紡ぎし炊(かし)ぎ水
流星の果て新しき闇寄する
葡萄棚木椅子に残る日のほてり
新涼の身に添ふ影や青畳
ぬばたまの闇から闇へ稲光

金沢　豊田高子

起重機の旋回夏を吊り上げて
棘著き蓮の浮葉の青畳
網所小屋や家持恋ふる行々子
ラジオ聴き糠床かへす終戦日
砦跡雄叫びかとも野分だつ

金沢　松井佐枝子

青田波畦より仰ぐ五重塔
句碑の辺を沈思黙考蟾蜍
夕渚小股走りの小鯵刺
打ち落しみれば金蠅小さきかな
天徳院裏の三坪に赤かぼちや

金沢　石川純子

能登美し五重塔に青田風
夏雲の湧き立つところ水平線
初秋の痩せし砂浜(千里浜)砂足せり
八月の大禍次々列島に
神木を見上ぐる真昼蟬しぐれ

金沢　河野尚子

新港になほペンキの香大南風
生演奏のまなかひは海晩夏光
ゴンドラの窓斜交ひに峡花野
立山を拝みケルンに石を足す
さらりと散りふはりと開く沙羅の花

内灘　塩井志津

千年の神木倒れ梅雨出水
夏羽織少年棋士の深き礼
浦風に咲き継ぐ沙羅や師の忌月
ひらひらと蝙蝠増ゆる薄暮かな
少国民も泣きし八月十五日

七尾　谷渡末枝

能登空港発最終便は西日中
葛また葛ランプの宿へ七曲り
○苫小屋に稼ぎを分くる鮑海女

処暑なれや亀甲柄の試し織り
石垣に生身の色の蛇の衣
地蔵会や布施に畑のものばかり

敦賀　石田野武男

梅雨出水ひと満載の避難船
泥染の紬重たし今朝の秋
無人機の飛ぶきりぎしの秋怒濤
新豆腐減塩食の腑にしむる
産褥の牛へ藁足す白露かな

敦賀　倉谷紫龍

螢とぶ柩の友へ数珠もたす
雪加鳴くお初小袖の濃むらさき
白山の岩肌洗ふ姥が滝
万緑や虫喰ひ粗き薬師仏
蟬鳴くや笈摺寂ぶる納め堂

敦賀　倉谷ます美

青梅雨や侍女の囲めるお初墓所
釈迦牟尼へ近江の粽供へけり
天秤棒はこぶ鵜籠の雫せる
崎宮の夏もてなしの薬草湯
陰陽石祀る社に茅の輪結ふ

敦賀　靄田勝子

穴太寺や夏掛けに寝る撫で仏
海神の閻に一条烏賊釣火
○近道のをなもみ裾に訪問医
能登の風杼にすべらせて上布織る
灸すうる母の百会や薬の日

徳島　福島吉美

水打つて地球を冷やす夕間暮れ
薬師道にぶき音して蓮開く
蜘蛛の巣の軒に仕上ぐる速さかな
○灼けし墓冷やす馬穴の水二杯
御堂まで垂れの匂へる鰻の日

徳島　村上和義

出征の旗を広げて盆用意
戦争はもう始まつてゐる終戦日
渦に湧く歓声高し夏の海
発心の一番札所蟬時雨
田の縁をまた折り返す鬼やんま

徳島　宮西修一

菩提寺の手押しポンプや百日紅
我が庭の薬味を添へて冷さうめん
苔の花六百年の楠の洞
蚊遣火の灰の右巻き左巻き
畳みたる傘の中なる残暑かな

室戸　安岡みさき

浦の畑魚臭をまとひトマト熟る
衿堅く整へて出る茗荷の子
太平洋踏まへて銀河立ちあがる
灯台を源流として天の川
旅人の居着く外寝の月見浜

高知　仙頭宗峰

帰省の子海の青さを飽かず見る
青く澄む故郷室戸の海涼し
末弟の早世叱る墓参かな
○志士永久に十六歳や碑の灼くる
難聴の妻に風鈴二つ吊り

長崎　丸本祥夫

父に似る爪の縦筋落花生
姉の背のどんどん離れ盆踊
つばめ去りふだんの風にをさまりぬ
原爆は一瞬被爆一生長崎忌
思案橋へ寺一列や蘇鉄の実

那覇　前田貴美子

路地あれば猫ゐて風の芭蕉かな
みな少し離れて遊ぶ草の花
結ひなほす白糸秋のすだれかな
母と子の夢へ銀河のひとしづく
会へぬ名をポストに落す星祭

那覇　大湾宗弘

出目金の水呑むやうな息づかひ
すこし揺れ秋の簾となりゐたり
甘蔗畑のダンプ埃や蟲蜥
翅脈まで見えてとんぼの翅の影
月光に濡れ椰子蟹の爪の色

那覇　比嘉半升

米軍の兜重たき案山子かな
秋の波引く時鳴らす珊瑚殻
貝売りの婆のかごとや福木の実

稲妻や一瞬あをむ厨妻
健啖を自粛もならず獺祭忌

那覇　當間シズ

コロナ禍の自粛自粛や守宮鳴く
葉表に音の先立つ夕立かな
夕凪や漁師の島のてんぷら屋
一瞥をくれて向き変ふ大鎌切
錆びてなほ縁に残り香九里香

九里香＝月橘の中国名

那覇　中本清

泡盛を喉に落として決意あり
聞き役に飽きて団扇を強く振る
紅型の伸子の張りや首里秋日
○ルビで読む琉歌大全黒木の実
二番座へ届く浦風ばんしるう
エイサーを遠くに夫の風呂加減

宜野湾　呉屋菜々

摩文仁の丘　平和の礎
夥しき死者の名曝し摩文仁炎ゆ
大いなる唐屋根の反り真炎天
泰山木の名残の一花夏旺ん
浜木綿や島の桟橋魚捌く
連絡船待つ日盛りの阿檀かげ

西原　宮城勉

溶けさうな空を支へて鳳凰木
人影の陰ろふ四辻広島忌
長崎忌風のほむらに水を撒く
戛戛と夜の足音敗戦忌
捨船を組み伏し阿檀実を零す

豊見城　渡真利真澄

闘牛に汐浴びせゐる麦藁帽
涼しさや冠羽広げてヤツガシラ
夏灯御嶽混み合ふ甘蔗御願

甘蔗御願という神事あり

七尺の夏甘蔗供へ御嶽社
即席の直会所守宮鳴く

お詫びと訂正

▽10月号28頁の上段、後藤桂子さんの一句目を次のように訂正。

瞼の師椽に紫煙の白絣

▽10月号30頁の下段、前田貴美子さんの四句目を次のように訂正。

星涼し母の日記に見不知ぬ名

同人作品の佳句

内海良太

尺蠖に計られてゐる肩の幅　森山暁湖

歩いていて肩に昆虫が付いていることがよくある。大抵はあまり気にもしないが、見慣れない虫だと気持が悪い。掲句は尺蠖、肩の上を独特な動きで歩いているのを、肩の幅を計っているようだと俳諧味のある暗喩で捉えて面白い。

泳ぎつつ米寿の背ナを裏返す　赤松郁代

赤松さんご自身のことだろう。健康増進に水泳は身体を満遍なく動かすので効果的。ゆっくりクロールで泳いで、プールの半ばでクルッと背中を裏返し背泳ぎに変える。米寿の元気の源はここから来ている。言葉に無駄が無い。

夏芝や飛石ふんで桃林軒　広瀬俊雄

芭蕉関連の句には心が騒ぐ。桃林軒は甲州谷村藩の家老高山樗塢の別荘(今は山梨県都留市)。天和2年の江戸の大火で芭蕉庵が焼失したとき、俳諧仲間の高山樗塢の招きで、芭蕉はしばらくここに滞在した。桃林軒は谷村城址の閑静な中に復元されているようだが、ここを訪れた広瀬さんに様子を聞いてみようと思う。

大富士の風の煽れる着莫蓙かな　加山ひさ子

何年か前、俳人協会で滅び行く季語を特集したことがある。その中に着莫蓙が含まれていて、昔、着莫蓙を着て、焼畑を体験したことがあるので寂しい思いをした。着莫蓙は軽くて風通しが良く快適だったのをおぼえている。この句は富士山の見える畑、着莫蓙をひらひらさせながらの農作業は能率が上がる。確かに珍しい季語になってしまった。

志士永久に十六歳や碑の灼くる　仙頭宗峰

土佐の仙頭さんなので、この十六歳の志士は土佐勤王党の志士だろう。土佐勤王党には坂本竜馬や中岡慎太郎も名をとどめているが、土佐藩は尊皇攘夷をめぐって複雑な経過をたどっている。碑には姓名と年齢が刻まれてあるのだろう。

近道のをなもみ裾に訪問医　靏田勝子

訪問医は忙しい。近道があれば近道を行く。ところがこの近道はあまり人が通らないらしく草がボウボウ。おなもみに苦戦する白衣の先生の様子が可笑しい。意外性の面白さ。

ルビで読む琉歌大全黒木の実　中本清

琉歌はオモロより成立は新しいという。日常生活で体験した出来事を即興詩にして、これを三線の調べに乗せて歌う。8．8．8．6音で哀愁を帯びた独特の音楽は、私の沖縄勤務時代、意味は分らなかったが中々魅力的だった。

島々の庶民の方言が多い歌詞なので地元の中本さんでもルビ無しでは分かりづらいのかも知れない。

そういえば黒木材の一部は三線の棹の材料に使われているそうだ。いつか「万象」の全国大会で中本さんに是非「琉歌」を講演してもらいたいものだ。

新同人発表

次の諸氏を「万象」新同人（令和二年十一月一日付）に決定しましたので発表します。

入山繁幸　謝花寛営
売野　緑　砂地宏子
大林彬彦　中鉢弘一
岡村純子　平岡　功
草間三香子

主宰　内海良太

新同人への祝辞と激励

令和2年度、万象俳句会の新同人おめでとうございます。日頃のご努力が実を結ばれたことを嬉しく思っています。

本来ですと毎年秋に開催される「万象」全国俳句大会で、新同人の発表と紹介がありますが、今年の「万象」全国俳句大会は、新型コロナウイルスの感染拡大により中止となり、代わって、11月号の「万象」誌上でご本人の言葉をご紹介することにいたしました。

「万象」は「風」の終刊により平成14年4月、滝沢伊代次により創刊されました。誌名の「万象」の命名は万象創刊同人・故木暮剛平氏（元電通会長）です。

早いもので来年は創刊20周年を迎えます。

今や、「万象」は新旧交代の時期に来ています。新同人の皆さんには、これからの新しい「万象」の旗手として大いに期待をかけているところです。

毎月の俳句実作に加え、編集部の注文にも応じられるよう、研究・評論にも意を注いで下さい。行く行くは自分で句会を持ち、後進を指導する役割をも意識しながら、「万象」で俳句を大いに楽しんで頂きたいと思います。

新同人おめでとうございます。

内海良太

入山繁幸（大阪）

昭和22年　千葉県生まれ
平成8年　日航俳句「せいは」入会
同　9年　「風」入会
同　14年　「万象」入会

〒534－0024　大阪市都島区東野田町4－17－8

このたび同人として皆様のお仲間入りさせて頂きました入山繁幸と申します。内海良太先生と同じ会社に勤務していた時俳句のお誘いを受け、会社の同僚と参加した奈良二上山吟行で先生の説明や解説が面白くて、俳句に興味を持ちました。

現在、日航俳句会「せいは」、その下部組織「羽田句会」と「大阪句会」とに所属。大阪句会は発足してまだ6年目の若い会です。「せいは」での最初の句〈甘樫や古代のままにほととぎす〉が良太先生の特選句となり、当時、気を良くしたことを今でも憶えています。

趣味は、定年退職後を見据えて在職中から始めたランニング。走りながら季節の移ろう景色に作る俳句は、同じ場所であれ新しい発見があり面白い。ただ走り終えた頃忘れてしまうのが年齢のせいなのかなどと思う昨今です。18年目を迎えたランニングも今年はコロナ禍で思うように走れません。

早く終息することを願っています。

売野緑（佐野）

昭和20年　新潟県生まれ
平成5年　「風」入会
同　14年　「万象」入会

〒327－0104　栃木県佐野市赤見町3579－21

今年の春、後期高齢者の仲間になりました。健康面や断捨離等、考えなくてはと思っていた矢先、ある週刊誌に「あなたのこれからの十年の歩み方」という見出しを見付け、これは正に私の事では！　と思い、健康や家族の事、趣味や旅行の事、色々な想いが頭に浮びました。現在の私は、家事のほか、花や野菜を育て、俳句の他小物作りをする程度の平凡な毎日です。

そんな時、家族と一緒に遊びに来た中学三年生の孫が漢字練習帳を広げ勉強を始めたのです。が彼は「感心」と書くところを「関心」と書いたのです。そこから、皆で感心について話が盛り上がり、昔、私が息子達に「感心」「感動」「感謝」「感激」の四つの「感」は大切だよ、と言った事を、皆で思い出しました。これからは、この四つの「感」を生かし、俳句を楽しく頑張って行こうと思います。

大林彬彦（調布）

昭和21年　新潟県生まれ
平成27年　「春耕」入会
同　28年　「海程」入会
同　30年　「万象」入会

〒182－0005　調布市東つつじヶ丘3－13－6

趣味は釣りと野球。磯釣りは大佐渡の岩で三歳より。今でも生き甲斐。野球は小四より。中二で上京、大人のチームに入って多摩川球場で初本塁打。中三の時三十本の本塁打を放ち、長嶋茂雄の弟と卒業式名簿に書かれる。立大に入学金を払った後早大に入れといわれる。早大には谷沢健一という凄い四番打者がいた。応援部に回った。応援は今も趣味で神宮球場その他へ行く。日大三高の小倉監督は教え子なので応援、甲子園へは二度。炎熱地獄。特技は無し。「俳句です」と言えるように精進中。写実を礎に象徴や幽玄の世界へ進みたい。と同時に社会詠時代詠に挑み、仮作の歴史を創造したい。虚子のように政治的意思表示をしないのはダメだ。戦争を許すことになる。現状は〈むざんやな甲の下のきりぎりす〉（芭蕉）という所か。妻は心臓病、私はクモ膜下出血後の痺れで〈滝となる水はしづかに絶壁へ〉（彬彦）の心境。二匹のアビシニアン猫（♀♂）と次女と長女に勇気をもらっている。

岡村純子（東京）

昭和26年　福岡県生まれ
平成18年　「万象」浦和句会入会
同　21年　「万象」入会

〒168－0082　東京都杉並区久我山4－41－14

この度は、新同人にご推挙頂き心より御礼申し上げます。戸惑いもありますが、好きな俳句ですので、ご指導のもと一つ一つ積み重ねて勉強していきたいと改めて思っております。

俳句との出合いは小学生の頃でした。母と初めて俳句を作った事が心に残っています。子育ても終り身の回りが落ち着いた頃、飛高隆夫先生ご指導の同窓会生涯学習講座「俳句」に参加し、俳句に触れるようになりました。その講座で、細見綾子先生の俳句に出合いました。普段から見たり、触れたりするものを詠まれていることに感動しました。私もこうした俳句に近づけるようになりたいと思い句作りを始めました。

見たものをそのまま句にすることは難しいのですが、作り続ける事を信条としています。コロナ禍の中ですが、近くの井の頭公園や神田川の周辺を歩きながら、自然から受ける感動を大切にして、自分らしい俳句を作っていけたらと思っております。

草間 三香子（東京）

昭和16年　富山県生まれ
平成19年　「万象」入会

〒175－0091　東京都板橋区三園2－17－8

私の故郷は、富山県の氷見市。子供の頃、学校の道すがら茅花を摘んだり、すかんぽを食べたり、のどかで豊かな自然に囲まれ、五人兄弟の四番目で自由気ままな生活でした。その後、上京し、目まぐるしい変化に馴染めずホームシックにかかったことも一度や二度ではありません。

就職、結婚、子育てに追われ、子供が成人してようやく、主人や友人と海外、国内旅行に出られるようになった時、この大切な時間に何か続けられる事を身に付けようと考えました。NHK俳句教室で岩崎眉乃先生のご指導を受けたのをきっかけに「万象」に入会。「本郷句会」「杜の会」へも参加するようになりました。三年前に眉乃先生が亡くなられた後、「本郷句会」は須賀允子、山本右近先生に、「杜の会」は内藤恵子先生のご指導のもと、現在に至っています。「杜の会」の幹事を引き受け、コロナ禍の中、四月、五月、六月は有志の通信句会となりました。七月になって有志の句会を開き「杜の会」のみなさんと再会し、続けられることを喜び合いました。

謝花 寛営（那覇）

昭和25年　沖縄県生まれ
平成18年　「万象」入会

〒900－0033　那覇市久米1－7－1－301

教会と自宅を往復する日常から、開拓伝道という非日常へと変化してから一年が経つ。

現職の仕事を辞めて、神学校を卒業したのが六十代後半になっていた。毎週日曜日は礼拝があり、講壇で説教をしなければならない。これがなかなかしんどい。教会に通う日常が礼拝説教という非日常に変わりつつある。日々の生活の中で、俳句を生み出すという作業は必然、教会生活と日常の周辺事象に関するものが多い。教会ではもうすでに老年の域に手が届いている。私はまだまだ若いつもりでいる。とにかく、新しいことにチャレンジする気持ちを持って歩んでいきたい。

私の俳句は日常詠と教会詠が多い。それは、そっくり私の世界と重なっている。しばらくは、その世界に身を置いてみようと思っている。今の生き様を楽しもうと思っている。この生き様を私なりに詠んでみようと思っている。

これからの主の豊かな祝福を祈りながら。

砂地宏子（武蔵野）
昭和28年　東京都生まれ
平成26年　大妻コタカ記念会生涯学習講習会「俳句」参加
同　28年　「万象」入会
〒180-0003　武蔵野市吉祥寺南町3-1-2-1305

令和二年の新同人推薦の葉書を内海主宰より戴いた時の気持ちは「ありがとうございます」の一言でした。

教員だったため、所謂「俳句」には一年に一度触れてはいました。しかし、句会に参加するようになったのは飛高先生の俳句講習会が初めてでした。万象会員となっても家の事情で所属する浦和句会に参加できない日々が続きました。俳句を投げ出しそうになる私に、飛高先生は「中央句会に出なさい」「兎も角たくさん作りなさい」と根気よくご指導くださいました。中央句会では同人、会員諸先輩の優れた句に接することで「俳句」「万象の俳句」を肌身で感じることができました。

同時に俳句への意欲も湧いてきました。昨年から浦和句会にも出られるようになり「さあ、これから」と思っていた矢先の推薦。有難いとともに「同人」の名に値するのかと不安もわきます。今は、先生方のご指導に応え「同人」になるべく研鑽を積みたいと思います。

中鉢弘一（札幌）
昭和19年　北海道　室蘭市生まれ
平成21年　「万象」札幌北句会入会
「万象」入会
〒005-0005　札幌市南区澄川5条3丁目9-10-414

この度、新人賞とともに同人推挙の栄を賜りましたこと、誠に光栄であり、心からお礼申し上げます。

俳句に出会って十一年余り。まだ俳句の入口にさしかかったに過ぎませんが、切っ掛けは妻と参加した自然観察会で、今は体調を崩して退会された北句会メンバーのNさんに誘われたことでした。「大自然の声を聴く」というその日のテーマでもあり、今考えると俳句への必然的な出会いだったかも知れません。

長年取り組んできた絵画、美術の学びの中での実感でもありますが、絵画、彫塑などの創作については、一旦潰したり削り取ったりの繰り返しの中から良き作品が生まれるものと考えます。俳句もまた同じような過程を経て納得の行く作品へと導かれるものと思います。日ごろの趣味としては、美術館巡り、料理、日曜大工などですが、今は三密を避け、森や海辺で自然の息づかいを感じながら作句を楽しんでいます。

平岡（ひらおか） 功（いさお）（徳島）
昭和16年　徳島県生まれ
平成28年　「なると」入会
同　30年　「万象」入会
〒770－0861　徳島市住吉2－4－26

私は、徳島の俳句結社「なると」（主宰　福島せいぎ先生）に入会し、同人として頑張っています。趣味は俳句の他に、ゴルフ、コーラス、詩吟です。ゴルフは企業勤務時に始め、現在も週一回のペースで楽しんでいます。コーラスは退職後徳島県で初めて国民文化祭が開催されることになり、その当時、徳島に男性コーラスが少なく、新たに男性コーラス部が結成されることになり、私もその一員に加わり、バリトンを担当し、十二年間合唱を楽しみました。さらに、詩吟にも興味が湧き五年前「楊心流日本朗詠会」に入会し、現在も週一回錬成場に通い吟詠を楽しんでいます。

日々の生活は俳句のお蔭で充実し、四季の移ろいも肌で感じています。例えば、ゴルフ場では、今まで気づかなかった鶯の鳴き声等も聞き取れ、また、周辺の景色にも目が留まる様になりました。さらに詩吟に於いても、漢詩・短歌に使われている言葉も新鮮に感じています。この様にこれらの趣味は俳句作りに大いに役立っています。

雑俳

第22回【女性の俳句】

八木　忠栄

何人くらいか正確にはわからないけれど、俳句をつくる女性は現在かなり多いと思われる。結社誌を開くと、男性に負けないほど女性が多い。時代に伴う女性の社会的立場の変化とも関連するのだろう。戦前までは、俳句を詠む女性はごくわずかだったと言われる。

女性俳人が増えたのには、高浜虚子の「ホトトギス」の影響も大きかったらしい。そのことをここで詳しく述べている余裕はないが、俳句史がそれを証明している。現代詩の世界でも、だいぶ以前から女性の台頭が目立つ。書店の棚には、『現代俳句女流百人』とか『女流俳句集成』といった分厚い本が並び、女性の詩歌だけを集めた『現代詩歌集』もある。吟行やパーティの集合写真には、にこやかな女性たちがわんさか。

手元にある筑摩書房版現代文学全集の『現代俳句集』（昭32）には、内藤鳴雪から金子兜太にいたる73名が収められ、うち女性はわずか8名。講談社学術文庫『現代の俳句』（昭68）には107名中、女性20名。

女性俳人増は大いに結構。女性ならではの名句がたくさん生まれていることを、私たちもよく知っている。

公益社団法人 俳人協会

天に近づく

大村峰子

青鷺の見詰むる水面雲速し
赤石岳の風下りて来よ夏座敷
産土の杜に一声赤せうびん
きのふより天に近づく赤蜻蛉
南瓜切る鉞てふを振り下ろし
茨線のごと胸丈の秋薊
木洩れ日にさ緑走る落山蚕
穴惑ひ静岡駅へ十六里
帰燕いま杉鉾の空旋回し
七夕竹またぎの村の辻神に

ここ三、四年全く吟行が出来ない状況にある。ただ、有り難いことに、山暮しは自然だけはいっぱいだ。

夏の初めの蜻蛉は夏茜と言うらしいが、茶の木の上すれすれを群れている。が、毎日見ていると、少しずつ高度を上げていく。秋になると杉の秀の高さまで上がっている。蝶々も同様だ。

毎年そんな光景をみて思う。蜻蛉も、蝶々も、私達も、全ての生物が天に近づきたいと願っているのではないかと。

ふる里

福島吉美

八頭洗ふ小流れ板渡し
大鮑殻はづされて捩れけり
亀の来る浜の鬼百合香を放つ
盆花を梯子継ぎ足し切り出せり
酢に浸す茹でし芋茎に紅奔る
墓山の荒るるふる里青芒
梅花藻の花咲く不思議旧街道
ふる里の新米を買ふ道の駅
浜の小屋覆ふ朝顔紺ばかり
移植せし菩提樹根付く盆の寺

今年は、コロナウイルスの世界的な流行の為、私の参加予定の行事は、すべて中止となりました。徳島で一番にぎわう阿波踊りも開催できず、ついに三味、太鼓のお囃子を聞くこともなく、八月は終ってしまいました。今までに経験したことのない現状に、ただメディアの報道を聞いている毎日でした。毎月の句会は、会員各自が遠慮がちになり心から楽しめるものではありませんでした。早くこの状況が収まり、元の生活に戻ることを願っております。

飛高隆夫自選句鑑賞⑲

散るものは散りてしまひて冬青空

全て散り尽くした木々の枝が差し伸ばす先の澄んだ冬の青空。四囲の山々から冷気と雪の匂いが漂ってくる。きっぱりと落葉した木々の潔さ、冬という厳しい季節への作者の背中を伸ばした快い緊張感が、読者の心の中に風となって吹き込んでくる。

しかし、なんと淋しく、心の奥底まで震えるような一句であろうか。これまで私の歩いて来た人生を振り返り、ふと重ね合わせてしまうのだ。地に落ちた枯れ葉達は、小さく丸まってカサカサと音を立てながら足元に纏わり付き、そして追い越してゆくのである。

私の住む集落から4㎞程離れた山間に「古屋敷村」がある。昔、養蚕や炭焼き等で栄え、分校もあったが、過疎が進み、今は移住者のみ数軒居住するだけである。かつてまだ村に七軒程残っていた一九八二年、映画監督の故小川紳介氏のドキュメンタリー映画が完成、上映された。『ニッポン国・古屋敷村』である。翌年には、ベルリン国際映画祭で国際批評家連盟賞を受賞した。各地で上映会が催されたが、その折の氏の色紙が手元にある。

「古屋敷の青空　小石を拾って投げると　ガチャンと音を立てて割れそうな空だった」

（森　和子）

與重郎芭蕉義仲さみだるる

句集『暮色』所収。平成24年6月、近江に芭蕉ゆかりの地を訪ねた折の作で、前書に「大津・義仲寺　二句」とあり、〈椎の木の青葉しぐれや翁塚〉にならぶ二句目。

義仲寺は、平氏討伐に戦果を挙げるも最後は源義経らの軍勢に破れ討死した木曽義仲の墓所。琵琶湖に面した景勝の地であった。時を経て貞享年間、荒廃した寺の大修理の頃より芭蕉が度々来訪、寺内の無名庵（側室巴御前が義仲を供養した庵）に滞在した。元禄7年芭蕉は俳諧の道への執着のうちに大阪に客死するが、遺骸は遺言により義仲寺に運ばれ、木曽塚の隣に埋められた。

與重郎は戦前から戦後にかけての異才の文芸評論家保田與重郎。その著『芭蕉』（昭和18年）において、芭蕉のわびさびは枯淡ではなく、その心は日本の歴史・伝統の中の詩人のまことを追い求め、その血脈につながろうとした「慟哭」だと論じた。彼は戦後の壊滅状態の義仲寺の再建に尽力、芭蕉翁塚の後方にその墓がある。

『暮色』は自然や季節の微細な陰翳を詠んだ句が印象的だが、掲句は大胆に人名を連ね異色である。下五「さみだるる」は「五月雨るる」景から心が「さ（接頭語）乱るる」に通う。熱く昂ぶる魂に生きた三者の塚を前に作者自身、心の騒ぎを覚えたのである。

（喜多尾明子）

福島せいぎ・内藤恵子自選句鑑賞⑦

この月のどこかにいくさはじまりし　せいぎ

句集『天蓋』所収。平成十四年の作という。

僧侶（徳島・満福寺住職）のせいぎ師は人一倍世の中の平和、人々の安心を願う心が厚いのだろう。そのことは、「平和を希う平成の…」で始まる、せいぎ師作詞の『新四国曼荼羅霊場和讃』でも明らかである。

第二次世界大戦後も戦争は、世界中で絶えることなく起きており、多くの人が憂えている。せいぎ師はさりげなく「どこかにいくさはじまりし」と詠っているが、なくならぬ「いくさ」への怒り、憎しみが深いのが読み取れる。

この句は、イラク戦争勃発の日の夜の作句と聞く。折しも中秋の名月が耿々と輝いていた。清浄な「この月」をよそにまたも「どこかにいくさはじまりし」と悲しみ嘆いている。水の流れのような平明な「詠み」だがインパクトは強い。

せいぎ師は人権問題に取り組むなど、幅広く活躍されている。かつて日本の統治下にあった台湾とも交流され、句集『台湾優遊』『台湾抄』がある。その『台湾抄』の中に〈日本の名もちしといへり焼芋屋〉の句がある。焼芋屋さんに親しみを込められているが、「日本の名もちし」に、せいぎ師の万感の想いを感じる。

（田中幹也）

藪からしの花にもも色みかん色　恵子

句集『冬芽』所収。夏になると、あっという間に小さな発条のような蔓で草木といわず、フェンスといわず手あたり次第に巻き付き、辺り一面に蔓延してしまう草である。幼い頃からビンボウヅルという名で嫌っていたこの草が「藪からし」という名を持っている事を、俳句を通して初めて知った。

そう、確かに小さな花をつけている。ピンクとオレンジ色の花が、線香花火が弾けた様に咲いている。植物図鑑によると、ひとつひとつの花はオレンジ色からピンク色へと変わっていく、と出ている。

作者は、その花の色を「もも色」と「みかん色」と果物を使って表現している。そこには作者の雑草への愛情を感じる。むせ返る暑さの中で、桃や蜜柑の果実の瑞々しさはまるで宝石である。藪からしの生命力の逞しさが誇らしくも感じさせられる。

今年もまた、雑草たちと格闘する季節がやって来た。作者も藪からしの繁る中で、夏の作業に汗を流すのだろうか。

「あれはもも色とみかん色よ」と、この佳句をとどめながら、私も励みたいものである。

（伊川玉子）

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊 俳句界 2020年11月号

特集 今もひびく昭和の名句（前編）
明治生まれの俳人50人が、昭和に詠んだ名句を紹介！
高濱虚子　松根東洋城　渡辺水巴　前田普羅
荻原井泉水　富安風生　飯田蛇笏　原石鼎
鈴鹿野風呂　長谷川かな女　久保田万太郎
水原秋櫻子　杉田久女　山口青邨　高野素十
相生垣瓜人　後藤夜半　川端茅舎　右城暮石
阿波野青畝　三橋鷹女　永田耕衣　西東三鬼
橋本多佳子　高濱年尾　中村汀女　山口誓子
秋元不死男　日野草城　皆吉爽雨　橋本夢道
中村草田男　星野立子　大野林火　平畑静塔
富澤赤黄男　加藤楸邨　篠原鳳作　石塚友二
鈴木真砂女　細見綾子　橋本鷄二　安住敦
松本たかし　京極杞陽　中島斌雄　石川桂郎
岸風三楼　高屋窓秋　能村登四郎
●総論～昭和俳句の魅力　青木亮人
●補遺～その他の俳人たち　大井恒行

特別作品30句　青柳志解樹
〈グラビア〉俳句界NOW　岩津厚子
＊セレクション結社「あだち野」矢作十志夫
私の一冊　星永文夫「霏霏」
対談　佐高信の甘口でコンニチハ！　松本哉
別冊　投稿俳句界　一流選者14名！　日本一充実の投句欄

※一部変更の可能性があります。

株式会社文學の森　お求めは…●〒169-0075　東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

俳句 11月号予告

特別作品　黒田杏子・中村和弘・山尾玉藻

第66回 角川俳句賞 発表！
21歳、史上最年少
受賞作「赤い夢」50句……岩田奎
受賞のことば／選考座談会／候補作品15篇
選考委員　仁平勝・正木ゆう子・小澤實・岸本尚毅

連載
名句水先案内…小川軽舟／偏愛俳人館…恩田侑布子
現代俳句時評…白濱一羊／野菜の十二ヵ月…南うみを
漢字 四季折々…笹原宏之
シリーズ　コロナの時代の俳人たち　秋尾敏・佐藤郁良

付録　季寄せを兼ねた俳句手帖　冬・新年

10月25日発売
予価（本体945円＋税）

電子版同時発売！　電子版は「BOOK☆WALKER」（https://bookwalker.jp/）など電子書店で購入できます。
発行　角川文化振興財団　発売　株式会社KADOKAWA　https://www.kadokawa.co.jp/

特別作品評（9月号）　榎本文代

十二峠　佐藤雄二

作者の描いた絵画は「万象」の裏表紙を飾ってくれている。作品は十二峠を越えて清津峡を訪ね、豪雪地帯の遅い春の風景を詠んだ十句。

棚田みな斑雪に浮きて瀬戸の里

棚田は傾斜地に階段状にひらかれた水田。保存されて今は四季折々の美しい景観が見られる。「斑雪に浮きて」と棚田の雪を見据えて、緩み始めた山里の風景を詠んだ。

榛芽吹く十二峠の雪崩止め

山肌に施されている「雪崩止め」を写生して雪国の遅い春を伝えている。稲架に組まれる榛の木は、米どころ越後平野に多い。その大きな木の芽吹く頃が、待ちに待った春の始まりのようだ。

朧夜の牧之が筆の美人絵図

前句のルノアールの裸婦は知られているが、掲句は文人鈴木牧之の美人画である。見たことがないので『北越雪譜』を開いてみた。牧之の原画をもとにしたという挿絵から面長な越後美人を想像し、筆遣いは細やかだと思われる。句は「朧夜」で平凡に終わってしまった気がする。

径の辺に信女の墓やつくづくし

冬の間は雪に埋もれていた小さな墓。風化も激しいのだろう。雪が解けて地面からは土筆が伸びはじめた。墓も土筆も春のやわらかな日差しに包まれている。

草ゆらぐ　谷渡末枝

機を織り、お米を育てて能登に暮らす作者。お会いするといつも元気を貰える溌溂とした方である

モーニングコーヒー緑雨の椅子深く

「椅子深く」に寛ぎが。作者には雨なればこその朝の時間。

青葉木菟夜の余白を鳴き漁る

青葉木菟は初夏に渡来し青葉の夜に鳴くという。夜の静寂の中、しみわたるように「ほーほー」と鳴く声が。「鳴き漁る」の「漁る」は、鳴き続けているのか餌も捕っているのか迷う。

足で足洗ふ青田を廻り来て

おいしいお米を作るため、手間を惜しまず大切に育てているのでしょう。「足で足洗ふ」の動作に、田を廻って来た一日の疲れを思う。青田からは充足感も伝わってきた。

草揺らぐくちなはに声なかりけり

太く長い蛇が草むらをゆっくりと進んでゆく。青大将のよう。驚いて大きな声を上げ、足もすくんでしまいそうである。作者は静かに通り過ぎるまでを見届けて、「声なかりけり」と蛇の実態を捉えた。「草揺らぐ」の写生に支えられた不思議な句である

あさなさな水打つ野鍛冶の恋女房

「恋女房」に戸惑いを覚えた。寡黙な鍛冶職人に長く連れ添った愛妻であることは分かるが、「水打つ」の季節感からは遠くなるように思う。

同人作品評（九月号）

林　陽子

片意地のどこが悪いと草毟る　髙橋ひろ子

片意地とは、頑固に自分の考えを最後まで貫き通す、とある。「片意地を張るな」など否定的で、良い印象が少ないように思いますが、「片意地のどこが悪い」に、賛成の一票を投じたい派です。お一人で黙々と庭の雑草をむしり取っている作者の姿が見え、実感が伝わってきます。俳諧味があり、愉快で類似句がない一句です。草取りは、何も考えず「無」になる事の出来る良い手段だと思います。

惜しみなく散るはオールドローズかな　芝宮留美子

ヨーロッパの薔薇に中国の薔薇を交配して、新しい薔薇が出来た一八六七年以後をモダンローズ（現代の薔薇）、それ以前に栽培、鑑賞されていた薔薇をオールドローズという。香りが強く、花弁が多く、年に一度しか開花しないオールドローズ。ご自宅のお庭でしょうか。「惜しみなく散る」で、オールドローズの全てを言い表していて、句またがりの表現が成功しています。豊かな余情を感じます。

スコッチの氷金色新樹の夜　三屋英俊

ウィスキーの中でもスコットランド地方で造られ、最低三年間樽詰にして熟成させた物だけが、スコッチと名告る事が出来るという。若葉に覆われみずみずしい木々をわたる風、新緑の匂う初夏の一夜、お一人で飲むスコッチは、格別な味がすることでしょう。季語の「新樹」が利いています。スコッチの独特な薫り、色、又金色に輝く氷の冷たさなど五感を刺激し、新鮮にしてくれる句です。

梅花藻の花立ち上る禊池　山本とく江

梅花藻は、流れのある水の中で、たなびきながら自生し、水面に出た茎の先に小さな梅の花に似た白い花を付ける。流れにまかせながらも、凛とした花を付ける梅花藻の様子を「梅花藻の花立ち上る」と詠んだ。又、下五の「禊池」により、まるで梅花藻の一花一花が池の水で身を清めているようにも。小さな花に心を寄せ、自然と一体化した作者が花の生命の輝きを表現した句。

ときめきを螢袋に閉ぢ込めぬ　沢辺たけし

喜びや期待の為に胸がどきどきする「ときめき」。作者はそのときめきを大切に螢袋の花筒に閉じ込めてしまったと言う。「閉ぢ込めぬ」により作者の強い意志、感慨にふける心情が伝わり、奥深い句になった。淡紫色の提灯のような筒に螢を入れて遊んだことから名付けられた螢袋。釣鐘草、提灯花、風鈴草とも呼ばれ想像がふくらむ季語です。

ポンプ井の晒新し夕薄暑　小林珠江

ポンプ式の外井戸の口には白い晒の袋が取り付けられている。ちょっと汗ばむくらいの初夏の夕方、下町の路地を散策中、真新しい晒に変わっている井戸を発見した作者。見逃してしまいそうな小さな対象を丁寧に写生する姿勢に脱帽。

下五の「夕薄暑」により、涼やかな絵柄が見えてきます。素直で平明な句。

干し竿の端つこ今朝も行々子　大村峰子

同時掲載句に〈大葭切朝の山気を掻き回す〉があるが、大葭切はギョギョシギョギョシと鳴くので、行々子とも呼ばれている。山中の早朝の冷え冷えとした空気を掻き乱す程、騒々しい声で鳴き交わす行々子が、毎朝自宅の物干し竿に出勤してくるというのだ。季語の「行々子」が動かない。

嬉しくもあり、ちょっと迷惑でもある複雑な作者の心情が読み取れる。静岡にお住いの作者だからこその一句。

一本の牡丹に庭の整へり　藤原千代子

色取り取りの花が咲き乱れる五月。手入れの行き届いた庭を眺めていた作者は、何か物足りなさを感じていた。牡丹がほころび始め、一本の大輪の牡丹の開花によって、漸く思い描いた庭となった時、はじめて納得「庭の整へり」と詠んだ。鮮明に光景が浮かんできます。十七音で、すべてを表現出来ていて簡潔な句。

また届く太き筍もてあます　宮西修一

到来物の大きな筍が二、三本、何とも羨ましい。北海道でたけのこと言えば、筍（孟宗竹）ではなく、竹の子（篠竹）が一般的。灰汁がないので調理しやすく、とても美味であるが、以前頂戴した「筍」を、米糠で丁寧に灰汁抜きし口にした時の美味しさは今でも忘れられない。作者は大きな筍を前にして「もてあます」と表現。太い筍の処理に困っている様子を言い得て妙である。

コロナはしぶとくなかなか消えてくれない。籠る暮らしも長くなりそうな今、日常吟を楽しみましょう。

リラ咲くと長き電話の北の友　呉屋菜々

となりの句が〈綾子師を偲ぶ話や水中花〉とあるので、「北の友」とは、おそらく我が師匠松原智津子さんでは？お二人の会話の内容を想像すると「ライラックが満開で街中とても良い香りよ」からはじまって、綾子先生との思い出話が取留めもなく続き、あっという間の一時間。

作者は沖縄、松原さんは北海道の人。これこそ沢木先生が常におっしゃっておられた「北は北海道から南は沖縄まで俳句でつながっている」ですね。

作者の弾む心が表現されていて人間味のあるとても楽しい一句に出合いました。

江戸古地図

中嶋久登（酒々井）

新樹光江戸の古地図の虎御門

雲の峰東京湾を跨ぐ橋

プレハブの事務所の窓の鉄風鈴

出目金の泡ひとつ吐き近寄りぬ

紫陽花の径を園児の黄の帽子

明日咲かす鋏の音や菖蒲守

朝顔や御旅所みんな古稀の顔

初蟬や日比谷御門はこの辺り

青葉木菟

本多ひとみ（静岡）

新緑に誘はれ試歩を延ばしたり

半眼の菩薩に対す夏の夕

朝凪や一湾映す空の蒼

静寂といふ贈りもの梅雨の闇

松の枝の影の差し込む夏座敷

松笠に足をとらるる朝曇

青葉木菟鳴くを待ちゐる病む床に

境内に入るや秋の蚊頻りなる

万象ノオト

テーマ「櫛」

母の櫛

札幌　八代洋子

櫛といえば黄楊、べっこう、竹、合成樹脂がある。古代エジプト時代から使われていた。日本では七千年前から使われていた。「苦死」という事で縁起の良いものでは無かったと言われている。

私にとっては忘れられない母の櫛の思い出がある。若かった時の母はとてもお洒落で身だしなみに気を配った。普段はエプロン姿であったが、外出の時は和服で、長い髪をすき、きれいな髪飾をつけた姿に子供心に憧れ、母が誇らしかった。

大人になったら、私も母のようにと思っていたが、今の私は短い髪に安物の使いやすい櫛。時には手櫛で終わる事もある。然し、櫛が毎日必要な道具であることは確かである。

美しい髪飾をつけた和装の母の笑顔がなつかしく想い出されます。

マーチの櫛

横浜　小板橋泰山

雄のシーズー犬のマーチは一九九六年に生まれ、我が家の一員に。白とゴールドの毛と愛くるしい瞳。人懐こい明るい性格で家族や近所の人、犬達に愛された。ペットの美容室が大嫌いで毛のカットと朝の散歩は私の担当に。ハサミ、ブラシ等を使い、仕上げに胸周りや背中にミンクオイルを振りかけて犬用の櫛で丁寧に梳かす。カットでは騒ぐマーチも目を細めて気持ち良さそうな表情が胸に残る。美容担当である私は、朝の散歩で出会う方に「いつもきれいにしているね。」などと言われるのが大層嬉しかった。マーチは長生きして、二〇一三年に一七歳で亡くなった。愛用した銀色の櫛、毛玉取りのブラシ、たくさんの写真等は今も大事に保管し、生前のマーチの満足した表情を思い浮かべる。

母の中剃り

川崎　横山ユキ子

「櫛」と言う文字から古の雅な物語を想像する。

現在多く使われている、合成樹脂のそれでなく鼈甲や黄楊などを用いたものを「櫛」と言いたい。

私は亡き母から貰い受けた黄楊の櫛を鏡台から探し出した。櫛は黄ばんだハンカチに丁寧に包まれ、かすかに髪油の匂いをのこしていた。

豊かな長い黒髪が自慢の母であった。子供の手にあまる大きな黄楊の櫛で、母の髪を梳ってあげると目を閉じて気持よさそうにしていた。

母は「中剃り」と言って頭部を六センチほど円く剃っていた。髪の多い母は頭髪を少なくして、髪を結っていたようだ。

年老いて髪を切る事になった時の母の涙が思い出される。

母の黄楊の櫛

佐倉　米田敏子

戦後75年の夏を迎えました。

今年は猛暑日が続き、日中はぐったりして何も手につきません。テレビを見ながらついうとうとしてしまいます。

さて私の娘時代は終戦間もない頃で食べ物、着るもの、生活全般に渡って大変困難な時代でした。女学生の私は長い髪を三つ編にしておりました。母の鏡台の前に座り椿油を付け黄楊の櫛で髪をすいてもらいました。手入が良かったのか黒髪がつやつやでした。「カラスの濡羽色」とも言われました。

その後月日は流れ、昭和、平成、令和となり、現在は、新型コロナウイルスの感染拡大が、何時収まるかわかりません。黒髪の私も今では白髪の老母になってしまいました。

秋麗やわが髪いとし母の櫛　敏子

活躍中の櫛

東京　三村紀子

我が家で櫛をたくさん持っているのは二十歳になるペットの猫である。飼い主の私がごく一般的なブラシ一本を主に使っているのに対し、猫は先に旅立った同居猫のお古も含め、様々な形や素材の櫛を持っている。何しろ櫛を使う時間は私自身よりも猫に対しての方が圧倒的に長い。夏冬の猫の換毛期に抜け毛と苦闘するたび、もっと良い櫛があるのでは、とついまた新たに櫛を買ってしまう。

近頃は米国製の櫛が大活躍している。櫛の歯の特殊形状により、ひと梳きで実に大量の毛が取れる。毛の手入れが短時間で済むようになり、猫への負担も減る。抜け毛は櫛に留まり掃除も楽だ。製品名はファーミネーター。ファーは被毛のＦＵＲで、映画ターミネーターを連想させるのが面白い。

七井村の櫛

東京　島野ひさ

関東大震災では奇跡的に被害を免れましたが、第二次世界大戦の最中、小学生だった私と妹は栃木県の七井村へ疎開させられました。私たちは空き家となっていた青年学校の大広間に男の子も女の子も皆一緒に枕を並べて、集団生活が始まりました。

そんな或る日、まだ幼い弟を連れて東京から母親が面会に来てくれました。物資不足の東京から来た母は、久しぶりの親子四人の買物を楽しみ、黄楊の櫛を求めました。少し乱れた髪に母が挿した黄楊の香りが忘れられません。奇しくも、その夜の東京大空襲で、一人東京に残っていた父が亡くなりました。面会に来ていた母と弟は難を逃れることができたのです。夫を失った母の髪には七井村で求めた黄楊の櫛が残りました。父の形見のように。

「万象ノオト」投稿募集

▽3月号「ラジオ」（11月末日締切）
▽4月号「鏡」（12月末日締切）
▽長さ　本文 17字×19行以内
〒194－0041　東京都町田市玉川学園3－10－19　桔梗　純

俳書探訪

曽根　満

「俳句界」（7月号）より

「（特集）この夏、自選力をつける！」欄を紹介します。

この特集の意図は、「俳句に自選は必要不可欠であるが、苦手としている俳人は多い。かつて波多野爽波が『多作多捨』を唱えたが、それには『自選力』が必要となる。はたして『自選力』とはどんな力なのだろうか。自選が求められるシチュエーションごとにアドバイスをいただいた。」と書いています。

総論　自選と他選　対馬康子「麥」会長・「天為」最高顧問
自選のポイント　今瀬　剛一　「対岸」主宰
捨てる勇気　和田　華凛　「諷詠」主宰
もう一人の自分
句集における自選力　奥名　春江　「春野」主宰
次へのステップ　山崎　十生　「紫」主宰
自選力の養い方　秋尾　敏　「軸」主宰
読み手にどう読まれるかを考える
師から学んだ自選力　渡辺誠一郎　「小熊座」
名句を鑑賞することなく推して敲いて拓く　高田　正子　「藍生」
「投稿俳句界」に見る自選　高橋　将夫　「槐」主宰
作者ならではの視点　鈴木しげを　「鶴」主宰
虚心大切

このように、五つのシチュエーションに論をすすめています。そのすべてを紹介する紙幅もありませんので、「自選のポイント」の「捨てる勇気」と「もう一人の自分」を引用させていただきます。ご参考になればと思います。

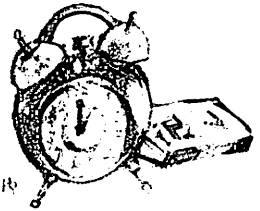
今瀬氏　月に百から二百ぐらいの作品らしきものができる。それを主宰誌に発表するために十句に絞るのだが、この作業が実に辛い、読み直してみて自分の意に沿わない句を赤線で消していくのである。（略）その際に重視していることは自分の感動を自分の言葉で表現出来ているかどうか、この表現で私の感動が相手に伝わるだろうかという二点だけ…。そうして消していって残った作品にも不満はある。ここはこうじゃないかとか、この言葉はそぐわないとか添削をすることもある。そうして出来上がった作品を私は自信を持って自分の雑誌に発表するのである。

和田氏　私は目に見え心に浮かんだままを素直に句帳に書いて俳句にしていく。一句詠んだら、違う対象に心を移して又一句、そのまま何句か詠んでいく。そして少し時間をおき、深呼吸してから読み返してみる。その時の私は句を詠んだ時の私ではなく、出来るだけ遠い所に心をおき、「もう一人の自分」となって読んでみるのである。（略）他人に述べようとすることがきちんと伝えられている句であるかを、「もう一人の自分」となって、客観的かつ厳しい目でいろいろな角度から読み返す。推敲を重ね、もう一人の自分がOKを出してくれた句を自選の句として発表するようにしている。

（筆者住所　〒422－8042　静岡市駿河区石田二－九－五）

万象作品

飛高隆夫選



凍裂の跡が住み家や蟻の群　札幌　中鉢弘一

雨あとの森に艶なす蜥蜴かな

夏つばめ戻るも今は廃校舎

青芒分けて小川の沼に入る

少女駆ける海のまぶしさ浜おもと　那覇　謝花寛営

夏ぐれの過ぎたる風の海より来

遺影拭ふ母の繰り言盆用意

秋風や書き込み多き我が聖書

梅雨明や玩具の猿が鉦たたく　調布　大林彬彦

特攻の海やヨットの疾走す

大統領の折鶴しづか原爆忌

セーラー服の遺影の父や敗戦忌

歩道脇すくと一本夏薊　武蔵野　砂地宏子

とんばうを追ふ父と子とその影と

向日葵が目印野菜直売所

若き鵜の座は定まれり池の杭

石橋に来て帽子とる涼しさよ　東京　岡村純子

門先の触れて零るる花南天

大ぶりのでで虫雨後の木の門に

椋鳥の渦なし降りるキャベツ畑

流木の生皮剝ぎて秋出水　秦野　秋山憲三
新涼や山気をはこぶ夕の風
今日の日を惜しむが如く蟬時雨
中空を勢ひ上がる夏の蝶　静岡　杉山紀美子
学校の裏山昇る梅雨の霧
川音の山へ響けり梅雨茸
石棺へ先端触るる炎花
軽鳧の子の登呂田に水輪重なれり
荒梅雨や蔦の細道石多し　静岡　髙橋一夫
木のうろに重なりてをり梅雨茸
親つばめ夕白波を低くとぶ
声かけに釣り人無口芦茂る
山百合のしなりて径を通せん坊　芳賀　福武幸子
虫集く水屋の跡の古き井戸
楢の木を蹴つて落とせる甲虫
縁蔭に本読み耽る尊徳像
青空をまさぐるやうに桜桃摘む　札幌　北浦詩子
水平線へウインドサーフィン一直線
海沿ひのハイウェー跨ぐ二重虹
虎杖の咲く線路わき小樽寂れ　佐々木　茂

コロナ禍やマスクつけをる油照り
砂利の浜に昆布敷き詰め天日干し
向日葵の迷路さまよひ日の傾ぐ　札幌　島崎　洋
さんま漁振るはぬ港あくび猫
空知野や視野の果てまで青田風
真青なる空と共演凌霄花　園田鶴子
鴉来て蛇口をひねる暑さかな
オホーツクの海霧へ乗り出す毛蟹船
古き傷に重なる傷や鮭打棒　髙山晢英
錫杖に霧の流るる音迫る
噴水の千のつぶてや日を弾き
夕暮のほのかな明り夏椿　竹重富子
夏の森波もみどりの水源池
潮騒の遠いささやきすすき鳴る
十薬や廃線跡の車止め　藤原善明
岬鼻積丹ブルーの海の果て
キャンパスのポプラの揺るる大昼寝
雲海の途切れし底に富良野村
なだれ咲く額あぢさゐや雨しとど　八代洋子
香水の残り香かすかエレベーター

愛犬と別れしかの日敗戦忌

食べ頃を待ち切れず切るメロンかな　札幌　吉田克己

文机に緑の葉添へ額の花

点滴の一滴遅し明早し

緑蔭や微睡む胸の文庫本　江別　太田佳美

木下闇天満宮の花手水

崩れ落つキャンプファイヤー湖閑か

荒梅雨や川岸削る最上川　新庄　曽野部礼子

捨てきれず絵柄に染の古団扇

喉すぎて胃の洗はるる心太

柿若葉水車の音の途切れなく　東根　門脇好子

地下足袋の屋根職人の玉の汗

夏木立おけさ流るる舟番屋

蜩の声に聞き入る座禅かな　新潟　齋藤　信

稲の花追肥の時期を知らせをり

弥彦嶺の雲高高と秋涼し

大声で口の体操梅雨ごもり　斎藤ヨシ

葉隠れの胡瓜明日は食べ頃に

道端になぜか一本姫女苑

枝蛙葉裏に鳴きて雨近し　榊原キヨ子

指先に触るると崩れ梅雨茸

母の部屋今もそのまま梅雨湿り

菩提寺の錆びし風鈴音澄めり　新潟　佐藤幸示

つけ放しの深夜のラジオ明易し

杖つきてゆつくりくぐる大茅の輪

梅雨出水橋の上より眺めけり　佐藤シズエ

梅雨明けし夜や月出て星の出て

日雷長雨上る兆かな

いつせいに鬼百合の咲き路地の奥　髙野松風

登校の手のひら這はすかたつむり

けんめいに命生み継ぎ揚羽蝶

雨蛙並ぶ小さき石地蔵　中塚滋子

著莪咲きて根元明るし雨蛙

先がけの一花大輪べにはちす

風鈴の吊り残されし家古りぬ　三谷愛子

夏祭り中止のビラや公民館

軽やかに釘打つ大工梅雨晴間

うたた寝の頬杖はづれ夜の秋　燕　渡辺志ま

雷鳴や飲まぬ酒買ふ雨宿り

並ぶパン選りどり見どり終戦日

夏草やボールをさがす朝野球　宇都宮　安久都　登

ひまはりの迷路はるかに遠筑波　福田　弘

枕辺の麦茶のみほす熱帯夜

柴又の飴切る音や梅雨晴間

板の間に吸ひつくやうな跣かな

蜩やカレーの匂ふ山の家

二重虹子等指さして大き声　芳賀　稲川清子

あぶら蟬銜へて縁に猫きたる

夕焼や男体山見ゆる納屋の窓　北井茂子

大輪のスター気取りの紅芙蓉

沼の波静めて咲けりひつじぐさ

夕立後夜景ひときは煌けり

花莫蓙に集ふ媼の笑ひ声　真岡　上野恭子

蹠めく虚空狭しと大花火

朝日浴び影もろともに桔梗濃し

地に落ちて汚れを知らぬ沙羅の花　鹿沼　渡辺利子

ビニールのプールに親子寝そべれり

山晴れて風鈴の音の朝の窓

みんみんの力漲る城の跡　栃木　飯塚キミ

廃校の木立こんもり蟬しぐれ

ががんぼを窓の外へと夕厨

造味噌屋の軒に甘酒飲み干せり　佐野　荒川　進

暮れなづむ植田の鷺の濁り声

泳ぎくる亀の鼻先あめんぼう　飯塚満里子

石造の擬宝珠冷やか山の宮

檜皮葺の屋根の楓の風の道

隣町眼下に遠く螢かな　売野　緑

中天に月煌々と梅雨明けぬ

梅雨茸童話のやうな赤き傘

ふと気づくかなかなの声夕厨　金子恵子

山百合の香を運ぶ風歌碑の径

ラベンダーに止まる小蜂も風に揺れ

池の面の半夏生草揺れつづく　黒川しげ子

水草のなびける川の涼しかり

近よりて仄かに匂ふ白粉花

梔子の実葉の色をして膨らめり　齋藤ミチ子

百日紅正造旧居の中庭に

青田風古墳を包む夕日落つ

部活子の日焼けの脛の細きかな　店網洋子

山城や眼下に烟る梅雨の町

雨曇り夕菅の黄のそそとして
阿羅漢や雨に傾げるさるすべり
朝鴉蚯蚓をたらし翔ちにけり　佐野　仲山さよ子
雨煙る見え隠れせる蓮見舟
雨に濡れ古刹の庭に落し文　菰原美穂子
野萱草ぽつんぽつんと線路道
雨上がる空に明らか夏の星
掌に空蟬三つ子の笑顔　松田富夫
水弾く滝の行者の仁王立ち
朴の花見上ぐる山を明るくす
奪衣婆が睨みをきかす極暑かな　義本美智江
青しぐれ小楢林の幹の黒
雨上がる沼に子亀と水馬
快音の庭師の鋏梅雨晴間
スプレーの缶に大きく蚤の絵が　古河　青木正男
山寺は寄らで暮れけり麦の秋
稲滓火の灰ふりかぶる常陸かな
梅雨晴間工事現場を巡回す　さいたま　須藤初枝
露草の紫深し雨のあと
梅雨晴間雀の一羽楽しげに

荒梅雨やメール飛び交ふ師の訃報　新座　多田英治
桔梗や旧友逝きて沙汰も無し
青田風棚田見廻る白手ぬぐひ
空蟬の地にころがれる古刹かな　川越　岡野輝子
赤とんぼ草の葉揺るるままに揺れ
風涼し杜にひびける神楽笛
苦瓜を軽くあぶつて里の味　黒木敬子
ベランダの角に空蟬あふ向けに
竹落葉風に逆らひまとまりぬ
憂き事のひとつ解決髪洗ふ　津金房子
野萱草の花の天麩羅峡の店
心字池を鎌首もたげ蛇泳ぐ
花葵コロナ終息先見えず　常見イツ子
墓参り古き墓石に苔の花
夕焼の消ゆるまでゐる橋の上
紺深き千代女の里の朝顔よ　山本敦子
夏場所や復活力士の言重し
水打つて庭にかすかな風生る
空蟬の眼異様に光りをり　千葉　大月玲子
蟬時雨峡も都会も変りなし

水中花全身で水摑みたる　千葉　岡野惠美子

壁紙は若冲の鶏雷近し　喜多恭仁子

団欒に参加する猫夏籠る　高田みや子

不要こそ生くる糧なり文月果つ　松浦陵保

メロン喰ぶ遠出も映画も我慢して　柳澤道子

歌ひ継ぐ「長崎の鐘」原爆忌　小林あけみ

七十五歳終戦の日の誕生日　酒々井

わだつみの学徒の恋文白木槿　新谷八郎

大陸に墓参果たさず父逝けり　佐倉

雁渡る浅間嶺蒼く小諸路　日照り雨過ぎて聳えし雲の峰

夏の夜の習志野隕石天体ショー　新涼の野菜切る音厨から

卓袱台に漬け物玉子蠅叩　一夜酒舌に残りし米二粒　佐倉　有泉正夫

息止めて太く字を描く盆提灯　ドローン飛び朝日に光る稲穂かな

雨雫溜めて重たき合歓の花　永六輔の語録を読むや心太

梅雨長く猫伸びをする窓辺かな　やや曲がる胡瓜であれば酢の物に　杉田富美代

雷神や地を震はせて転げ落つ　みどり濃き田に白鷺の動かざる

消毒の本の積まるる梅雨の書庫　紫蘇の葉がほとんど占むる花壇かな　鈴木隆久

貨物車の連結音や青田波　噴水の止まつて戻る街の音

丸ごとの西瓜投げ入れ河馬の口　白日傘口を抑へて遠会釈

沢瀉の向きの揃へば儀式めき　北斎の波分け湯屋へ夏暖簾

民宿の褪せし畳や茄子の花　鈴木美根子

甚平を着る夫右肩下がりかな

機嫌よく今日も咲きたる日日草　立原千代子

泥足を草で拭へる夏野かな

手甲して土にはらばふ草取女

衣紋掛に菊の模様の藍浴衣　米田敏子

花莫蓙や子供の昼寝大の字に

夏たのし内房の海波静か

波ひくややつと見つけた桜貝

父の忌や極暑でありし野辺送り　習志野　清水礼子

若き父籐椅子にゐる写真かな

ポストまで片蔭拾ひ急ぎけり

杉箸の香りなつかし夏料理　船橋　内田節子

仰山の風をもらひし古団扇

読み止しの本伏せてきく遠花火

嗅覚のあるかの如し蟻の列　槐島　修

縺れつつ風に遊ばれ紋白蝶

きのふより声昂れり蟬しぐれ

梅雨出水赤子抱き上ぐ自衛官　柏　村田由美子

生き様を語る夫の背冷奴

父の忌やステテコの父横切りぬ

羅を解きて縫ひて肌掛けに　松戸　石川幸子

空蟬を五つ六つと見上げけり

夏見舞返ご無用と結ばれて

水底に亀潜みゐる大夕立　野田成夫

せがむ子に昨夜の残り庭花火

送り火の果てて疏水の甦る

老鶯や人影を見ぬ鐘撞堂　渡部洋子

雨粒を巻きて芝生にねぢれ花

道端に人待つごとし立葵

梅雨晴間波のひかりの乱舞かな　東京　石井登女

ワイングラス懐かしき日々巴里祭

さるすべり撫づる笑顔の父恋ふる

荒梅雨や尾長の低き枝移り　石山風童

天道虫友と憩ひし古ベンチ

黒揚羽貴婦人のごと去りにけり

戦禍あと今は公園蟬時雨　北口富栄

病院の前はバス停白木槿

波音に耳をあづけて天の川

掃き寄する音に散りつぐ花南天　草間三香子

ペットボトル枕に工夫三尺寝

まつすぐに虫の飛び入る誘蛾灯

血縁のまた一人欠け墓洗ふ　桑原優美子

朝顔の花褒めあひて路地暮らし

灼くる地を靴下を履き犬散歩

初蟬の静かなる声ひとしきり　小池清晴

街路樹の天辺飾る凌霄花

送り火の煙たゆたふ雨の中

ほぞ笑ふ乙女の夏となりにけり　小池宗彦

白南風や利根川くだる帆掛舟　東京　平子甲奈

秩父路や山栗を売る札所寺　福田ふみ子

あれこれと姑の指図盆用意　東京　高野翠子

冷麦の鉢はずしりと益子焼　三村紀子

レモン切るひと日の始まる香となりて　本多　葵

黒揚羽散歩の我の右ひだり　鶴田智美

蜻蛉来て定宿のごと竿の先　松本幸男

蟬穴に指先つつこみ笑ふ吾子　宮脇秋峯

益次郎像隠し踊りの櫓かな　中澤桃子

ひと気合入れ炎天に身を晒す　南場雅子

助六の絵柄よろしき団扇買ふ　長谷川信也

土佐犬の舌の根喘ぐ溽暑かな　三鷹　南場雅子

挨拶は額にずり上ぐサングラス　宮脇秋峯

文机に終日香る桐の花　長谷川はるみ

枯れてなほ紫陽花の球日を恋へり　馬場美智子

墓に供ふ父好みたる日輪草

食卓の端へ枝豆弾け跳ぶ

鏡台に使はぬ紅や梅雨深し

風鈴の雨よぶ音となりにけり

買ひかへて旅を待ちをり夏帽子

荒梅雨に負けじと蕎麦打つ音のして

パナマ帽載せし力士が乗車せり

紫陽花を一株植うる庭の幸

うつむきし螢袋に山の雨

水撒きの吾も快適小さき風

滴りや苔青々と川の音

降る音の中は我のみ梅雨長し

屋のうちに草の香満ちて夏嵐

青嵐我吹き抜けて去りてゆく

ファインダー君がうしろに虹立ちぬ

風鈴や波は静もり潮の香

箱釣の破れ杓子で追ふ子かな

地に落ちし躯に蟻の速きかな

片蔭や坂の上まで寺の塀

盆支度仏間に薫る菰莚

豪農の軒に三つの釣忍

白玉をほんの気持と出す尼僧

蟬時雨に包まれゐたる山の駅

窓開けぬ祭の声ののぼり来ぬ

えごの実のうす緑色鈴のごと

梅雨の晴尾長ビィーと飛び来たる

梅雨晴間ボール蹴る子の声高し　国分寺　中ノあさ子

日は沈みハイビスカスの一日果つ

花数多俯く茄子の紺の濃し

どぜう汁老いし夫婦の厄払ひ　国立　阿部幸子

夏深し朝もや森に深呼吸

廃線に鉄道草の高さかな

ひさびさの会議やたのし蟬の声　日野　渡辺八枝子

母の忌のこちら見てゐる飛蝗かな

新涼や葉裏に風の通り道

コロナ禍や薔薇園つぼみすべて切る　横浜　阿部トキ

夏草や牛の目にある空の色

散り敷きて坂がまつかや海紅豆

目高の子仲良いやうで寄り添はず　大駒泰子

老鶯の声の明るさ一服す

艶やかな雌しべ残して百合の散る

蟬の声俄に高し雨後の木々　岡　元枝

朝焼や明るき窓に目覚めたり

蝸牛豆粒ほどに糸の雨

いかづちの遠のき寝入る赤ん坊　奥野周光

日除け網這はせし西瓜実を結ぶ

靴の中足の泳げる驟雨かな

沙羅の花遠き山へと雲流れ　横浜　小板橋泰山

籐椅子や読みかけの本顔に伏せ

鮎の宿磨きこまれし長廊下　坂本具子

月見草浮御堂への道昏れて

渓流を一直線や岩燕

滝飛沫コロナの鬱を流しさる

家康の御廟への径岩煙草　鈴木律子

渋搗くや臼に浮きたる泡の玉

小流れを沈め溝蕎麦盛りなり

梅雨出水泥の匂ひのボランティア　富田　要

一陣の風に土の香夕立来る

眠る子の頬にひとひらえごの花

立葵青空高く咲きのぼり　長野高朋

平仮名の如く舞ひ散る竹落葉

青簾巻く手もどかし驟雨来る

夫に焚き兄に焚きつぐ門火かな　三木豊子

夕顔の開き切るまで引き留めし

絽の羽織脱ぎて始まる落語かな

カラフルな市松もあり夏マスク　横浜　村上明弘

半開の門扉の軋み竹落葉

うなぎの日今日は買はずと決めにけり

法螺貝の音の重たき梅雨の山　川崎　安田良子

扁額の大きな文字や梅雨の寺

庭陰に背丈を越ゆる草茂る

朝顔の蔓生き生きと垣の外　横山ユキ子

夫の墓夕蜩のひとしきり

検温の日課となりし今朝の秋

甲高く諸鳥鳴くや梅雨晴間　茅ヶ崎　久保田富士子

向日葵と日々背比べガーデニング

警報器鳴る踏切に黒揚羽

泥鰌鍋食らふや化粧などはせぬ　大和　中谷由郁

蟬生まる殻を外してうす緑

風折れの白百合咲くや夜の果て

山百合や空に明るさ満ちてをり　伊勢原　長嶋和子

水浴びの雀泥跳ね梅雨晴間

青田風水の香満ちて遠汽笛

梧桐や雨の続くといふ予報　山本カツ子

蚊遣香軒端にゆるる照る坊主

頃合ひの良き坂と言ひ大暑かな

湖に富士を見に行く秋立つ日　松田　古谷悠紀子

暑ければ熱きコーヒー昼下がり

百歳の葬淡々と蟬しぐれ

畦道を子らの駆け抜く青田風　甲府　江口嘉郎

亡き母の竹尺供へ盆用意

蟬時雨途絶え遠くに蟬の声

日は西へ岸辺に響く河鹿かな　静岡　田中秀幸

せせらぎの音に重なる蟇の声

満潮の河口を染むる夕焼かな

燕の子巣より半身を乗り出せり　筑地裕子

産衣の子抱きて向日葵咲くを見る

かくれんぼ紫陽花の毬動きたり

木洩れ日や白く光れる梅雨茸

三池に来て炭住跡の黒揚羽　内藤允昭

山門の前やはちすの開かむと

それぞれの色着こなせり熱帯魚　本多ひとみ

ぬか漬けの瓜二つ買ふ回復期

青葉木菟三度声してそれつきり

歓声やレンガのトンネル風涼し　望月　南

荒梅雨や蔦の細道水あふれ　　小梁洋子（焼津）

朝顔の一輪深きふちの色

厳島潮の香の濃き文月かな

いるか跳ぶ空青青と原爆忌

終戦日父沈黙を通しけり

玄関の柱を借りて蟬生まる　　鈴木裕一（川根本町）

産土の階に転がる柿青き

サングラス故郷セピア色にして

新しき掃除機の音梅雨明くる　　瀬野喜代子（津）

耳鳴りと思ひしがいま蟬の声

木槿咲く前に立たせて児を写す

抽斗に若かりし日のサングラス　　臼村喜久代（金沢）

苔庭に青葉若葉のかげり濃し

めぐりくる恩師の忌日沙羅の花

障子の色見よと呼ばるる大夕焼　　新出祐子

焼えびの殻高々と蟻の列

容疑者は顔洗ひしてゐる子猫

雨の色日の色ありて額の花　　高木艶子

岩肌に道刻みつつ滴れり

葉がくれのままに実梅の月日かな

海へ向き並ぶ砂像や大西日　　田上ナツ子（金沢）

糸蜻蛉入らずの森の闇に消ゆ

沖の帆や波きらきらと日の盛り

梅天の割れたちまちの大没日　　道場啓子

眼福や通りすがりに稲の花

藩制期の築地迫り出す朴の花

長雨に唐糸草のしよぼくれり　　廣田宏美

木曾谷に似たる木曾坂ねむの花

野田墓地を訪へばあちこち花萱草

母米寿生きかた語る沙羅の花　　松田好子

猛雨去り泥に埋もれし村夕焼

雨上がり鳥の眼光る青葉闇

行くほどに明るくなりぬ花野径　　宮崎惠美

初蟬や望湖台にたたずめる

老鶯の連れ鳴く森や風すがし

コスモスの絡り解けば風に揺れ　　谷内瑞江

緑蔭を得て話し込む女かな

万緑の真中新婦の白極む

里からの氷室まんぢゅう孫の手に　　朝倉みゆき（白山）

樋の雨水鉄砲のごとふきだせり

黄鶺の巣にくちばしの三つ四つ　白山　鶴尾正江
岩に立つ鳶の勇姿や風涼し
文字摺の小花つづりて今朝の庭
山林の万緑ゆれて雲を掃く
浮世絵の絵扇ゆかし江戸土産　敦賀　川口和代
百体の猿ぼぼ揺るる夏夕べ
久闊を叙して螢の夜はふけぬ
なほ白し水にうつりし沙羅の花　中川和子
芭蕉布を紡ぐや島の海鼠壁
涼しげに釉薬垂るる益子焼
蟬の声耳鳴りに似て首を振る　中村秀一
夏夕べ潮の香川を上り来る
空蟬を吹き転がして風去りぬ
日雀鳴く峠の茶屋の兜屋根　前川千代枝
菩提寺の庫裏鴫焼の匂ひせり
上布織る機音かろし能登の路地
烏帽子石の蔭に青鷺みじろがず　山本一枝
人語消しイグアスの滝とどろけり
蓮浮葉昨夜の雫をころがせり
昼くらき谿へひよどり声こぼす　大田ふじ枝

六地蔵頭巾新し雨蛙
九頭竜川の水にふれとぶ夏つばめ
祇園会や今年はお練り鉾に代へ　大阪　入山繁幸
白蓮の大鉢御堂落慶に
大都会灼かれて更に大西日
思ひ出の温泉の町梅雨出水　富田林　前島幸
堀へ向く隅櫓あと桐の花
公園の掃除夫ベンチで三尺寝
初蟬の途切れ途切れに鳴き始む　徳島　林早苗
梅雨湿り写経書き終へ仕舞風呂
辞書を繰る眼鏡のくもり半夏生
大観も魁夷も愛せし五月富士　平岡功
暁光にはや初蟬のハーモニー
蚊の羽音少年の日のB29　山本晴美
蔵清水名付けの親は珈琲店
終点の稲穂出揃ふ青田かな
蟬時雨目覚まし時計より早く
落人の里の螢火光り出す　山本瑤子
空蟬のしがみつきたる葉の揺るる
風に乗り黒揚羽消ゆ恋人岬

カノプスの壺の白さや砂嵐　石井　木内マヤ
父の墓地予定地に生る鶏頭花
折紙のトトロが並ぶ盆の寺
俳号で呼び合ふ仲間古茶新茶　小松島　岡田あゆみ
葉書這ふ蟻も一緒に投函す
蟬しぐれ母は時空を漂へり
おとうとの鍬形虫兄は標本に　田上幸子
菊の香や諷誦文を読む僧侶泣く
かぐや姫の古文暗唱星涼し
夕焼けの色の梅酒でうるほへり　福岡　園田清子
寝る前の十分体操星涼し
螢火やマイクロバスは闇の中
緑蔭に扱ひ習ふ草刈り機　鶴田輝代
大切株犇きあうて梅雨茸
蟬鳴くやツリーハウスへ高梯子
訳ありと書かれし西瓜甘きかな　宮田千恵子
千羽鶴飛ばして見たし夏空へ
七夕の竹よろよろと担ぎくる
増水の川辺ぎりぎり緋のカンナ　那珂川　髙山ひさ子
荒梅雨や位牌リュックに子の家へ

文具屋の売場に携帯扇風機
残る虫枕元まで近寄りぬ　長崎　下見直哉
短日や早ばや閉ざす露天商
冬夕焼丘の校舎を包みたる
紫陽花の葉ののびのびと花失せて　永田美知子
採れたての棘の洗礼初茄子
夏草や無縁仏へ風の道
ソーダ水あじびら立看みな昔　西海　山下敦子
猫の目の細さ極まり蟬時雨
鎌放し指深く組む原爆忌
風鈴の短冊足せる夕べかな　那覇　砂川道子
蟬時雨止めば木立の風見えて
ホスピスの窓より見上ぐ雲の峰
夏空に伸びやかな白飛行機雲　札幌　石田　睦
ペディキュアの深紅の素足下駄の音
墓参り雨傘しかと杖にして　多田陽子
球児等の脛の長さや甲子園
パレットの彩さながらに夏の庭　田邊政代
残照の鉄路に揺るる泡立草
兵児帯に祭り団扇を差しにけり　芳賀　塙　テル

川蟹を捕へ見せ合ふ園児達　佐野　木村君子
シャインマスカット一粒含み夕仕度　東京　安藤美酒々
ゴーヤー垂る三毳山の風を窓開けて　関口かつ子
珈琲店の扉の傍へ夏の萩　斉藤孝夫
万緑や出世稲荷の赤鳥居　高田貴子
桑の実を見付けすぐ喰ぶ老夫人　戸川節子
忍冬花父母の形見の槙覆ふ　高田貴子
授業中傘届け来し梅雨の母　西村サカエ
夏の雲ちやんで呼び合ふ友亡くす　藤田信子
コロナ禍にかぶさるニュース夏出水　船橋　入河　大
コロナ禍に逃げ道のなき暑さかな　松野寿美代
良太先生の便り届きし夏の午后　近藤澄子
かなかなの我が家にとんできてくれし　宮崎正義
終戦日後期高齢迎へたり　山口秀吉
梅雨明けを待てずに蟬の雨の中　原爆忌平和の像に鳥遊ぶ
髭ふりて吾をうかがふ油虫　柏　鹿毛満子
神殿の灯風鈴鳴りやまず　夏雲は夕日の魔法で朱鷺色に
初めての朝日に光る稲の花　松戸　菊岡緋路
コロナ禍や向日葵の世を待ちこがれ　日盛りの午後は自然の無言劇
頼まうと言ひているかに雨夜の蟇　市川　奥澤よし江
向日葵や一直線の道白し　深大寺蜩しぐれの真つ只中　府中　竹村晃子
賜杯受けそつとぬぐひし玉の汗　葛の葉にかくれ花芽の揺るる青
主なき西日のあたる文机　鬼百合咲く家を出て来る車椅子　横浜　加藤和子
コロナの日々監獄ロックや夏来る　矢継早の雷鳴に猫寄りつきぬ
九輪草土手いつぱいに蓼科に　夕暮の空の明るき梅真白　柴田雅春
早朝の御苑散歩の涼しさよ
子育てを終へ鴈去りぬ残暑かな
原爆忌夾竹桃の花の咲く
茄子の花終りに近く色深し
コロナ禍に暑中見舞は電話にて
月下美人咲くを気づかず朝迎へ
角帽の兄に会ひたし墓洗ふ

茎立や日差しのとほる庭の隅　横浜　豊　美佐子

水際で腹まで漬かる梅雨鴉　川崎　青木明代

門前の銀杏青く盂蘭盆会

さくらんぼ眺めては愛で食べて愛づ　鎌倉　佐藤千晴

狂はしき世に咲き乱れ凌霄花

生れたての動けぬ守宮張りつきぬ　静岡　大石弘子

路地を出る髭のサーファー海に向く

看板のをとり鮎の字跳ねあがる　金沢　矢野喜久江

熊蟬の声を浴びつつ庭掃けり

白鷺の中洲に四羽暴れ川　福岡　北野陽子

海の日に海より眺む富士の山

友の家玄関前に青簾　敦賀　高木艶子

夕焼けのあまりに赤き誕生日

鮎を焼く泳ぐやうにと串を刺す　温泉町　谷内瑞江

温泉町端より暮れて鳳仙花

柿の花猫はいつもの散歩道　桐咲きて思ひ出多き山の畑　色鳥に妻の行方を尋ねけり　福岡　内池宏行

亡き父の顔を浮かべて新豆腐

積み上ぐるテラスの椅子や雲の峰　相本和子

バトンのごと持ちて胡瓜の皮をむく

終戦日その日の記憶空白に　福岡　石原好宏

梅雨明けも近しとおもふ蟬時雨

新入会員のご紹介

長谷川　秀　子（静　岡）

万象基金のご報告（一口　二千円）

匿名	五口
匿名	十口
小林珠江	五口
内海良太主宰	五十口
内藤恵子	十口

（令和2年9月14日～9月29日・敬称略）

ご協力に感謝申し上げます。

「万象」発展のため、大切に使わせて頂きます。

万象俳句会

万象作品の佳句

飛高隆夫

凍裂の跡が住み家や蟻の群　中鉢弘一

凍裂は急激な寒気のために樹幹に縦に割れ目ができることをいう。その割れ目が蟻の住み家になっている、というのである。寒気の厳しい土地ならではの現象であるが、樹木に巣を構えるということであれば、温暖な地方でも朽ち木の割れ目を住み家としているのを見たことがある。作者は札幌の人。

秋風や書き込み多き我が聖書　謝花寛営

書物を読みながら、人はどのような時に書き込みをするだろうか。感動した時は傍線を引く。すると、疑問を感じた時、あるいは、問いが生まれた時、と考えてよいだろうか。「秋風」も初秋のさわやかな風から、晩秋の寂しい風まで、いろいろである。人生のその折々に、作者は真摯に神との対話を繰り返すのであろう。作者は那覇の人。

梅雨明や玩具の猿が鉦たたく　大林彬彦

梅雨が明けた喜びを、玩具の猿に鉦を叩かせることによって表現した。奇想天外とでもいってみたいような発想であるが、違和感はない。ネジを巻くのか、スイッチをいれるのか。本当に鉦を叩かせたかどうかはどうでもよく、作者の遊戯心を楽しめばよいのである。作者は調布の人。

若き鵜の座は定まれり池の杭　砂地宏子

「上野不忍池だろうか、鵜が池の周囲の杭に余さず止まり羽を広げたり休んだりしている。鵜の数ほど無いので、あぶれる鵜もいる。若い鵜がやっと杭を獲得した。やれやれの感がする」（内海主宰「中央句会選評」）。作者は武蔵野の人。

椋鳥の渦なし降りるキャベツ畑　岡村純子

椋鳥は全体的に灰褐色であるが、嘴と脚の黄色が目立つ。日本各地の人家付近の樹林やたんぼに群れ住み、果実や昆虫を食べる。集団で行動するが、例えば稲雀よりも体が大きいだけ迫力がある。「渦なし降りる」は、空が暗くなるほどの椋鳥の群れが、広々としたキャベツ畑に舞い降りる様子をきちんととらえている。作者は東京の人。

流木の生皮剝ぎて秋出水　秋山憲三

大雨が山崩れを起こし、根こそぎ引き抜かれた生木が、速い流れに運ばれるうちに、岸に当り、岩に当り、他の漂流物に当りなどして、ついには、樹皮まで剝ぎ取られてしまう。大雨による災害の恐ろしさを、写生によって生々しく伝える。作者は秦野の人。

石棺へ先端触るる炙花　杉山紀美子

石棺は同時投句の中に登呂遺跡が出てくるので、弥生時代のものと考える。炙花は山野に自生する蔓草で、花がお灸のもぐさに似ているというのでこの名があるが、全体に悪臭があり、正しい植物名は屁糞葛（へくそかずら）である。この句は眼前の景色をそのまま写生した句であるが、読み返していると、炙花が有情化されてくる。作者は静岡の人。

荒梅雨や蔦の細道石多し　髙橋一夫

蔦の細道は静岡市丸子から宇津谷峠に通じる国道の南方にある小道。伊勢物語の東下りの条に、「ゆきゆきて駿河の国にいたりぬ。宇津の山にいたりて、わが入らむとする道はいと暗う細きに、つたかへでは茂り、もの心ぼそく」云々とある。荒梅雨に表面の土が洗われ、石が露出していたのであろう。蔦の細道は歌枕であるが、現実をそのまま、むしろ素っ気なく詠んで、味わいが出た。作者は静岡の人。

檜の木を蹴つて落とせる甲虫　福武幸子

甲虫（兜虫）の雄は頭部に鹿のような大きな角を持ち黒褐色に光っている。子供に人気があるのは、この雄の甲虫である。今はデパートなどで売られたりしているが、櫟、檜、樫の樹液を吸うので、この句のようにそれらの木を揺すって落として、取ったりする。この句、「蹴つて落と」すという具体性がよい。作者は芳賀の人。

以下、三句組から。

奪衣婆が睨みをきかす極暑かな　松田富夫

奪衣婆は三途の川のほとりにいて、亡者の着物を奪い取るという鬼婆。この暑さは、奪衣婆が三途の川を離れて出張ってきたせいか。作者は佐野の人。

黒揚羽貴婦人のごと去りにけり　石山風童

揚羽蝶といってもいろいろあるが、なかでも黒揚羽は、もっとも神秘性が深いように思われる。この句、いい得て妙というべきである。作者は東京の人。

久闊を叙して螢の夜は更けぬ　川口和代

「久闊を叙する」とは、久し振りに会って話をすること。約束をしてのことか、偶然の出会いか。螢狩りを楽しみながら、大いに話も弾んだことだろう。作者は敦賀の人。

蟬しぐれ母は時空を漂へり　岡田あゆみ

「時空」とは時間と空間のことである。「時空を漂ふ」とは、時間の意識、空間の意識が曖昧になっている、ということか。気持ちをしずめて、そのような母を見つめている。作者は小松島の人。

同人会便り

第三回中山純子記念俳句賞作品募集

故中山純子先生の功績を顕彰、記念するために企画したものです。毎年一回作品を同人より募り優秀作を表彰、「万象」同人俳句の向上、発展に資するもので、多数の応募を期待いたします。細目は次の通り。

応募資格　「万象」同人に限る

作　　品　一人十五句、未発表作品に限る
　四百字詰原稿用紙（B4判）とし、冒頭欄外に題名を記入、また末尾欄外に住所、氏名を明記し、一通（コピー可）を提出のこと。封筒に「中山純子記念俳句賞応募」と朱書のこと。

選　　者　内海良太、小林愛子、原田しずえ、福島せいぎ、飛高隆夫、江見悦子、柳澤宗正、阿部月山子、井村和子

締　　切　令和三年二月十五日（月）

宛　　先　「万象」同人会事務局　〒195－0055
　町田市三輪緑山一－三－二－三一五　吉中愛子

入賞発表及び授賞　第十七回「万象」同人会総会（令和三年四月十六日㈮、学士会館(東京)を予定）に於いて。
　授賞者には第二回授賞者と共に賞状と副賞を贈る。

追記：Eメール応募の場合は左記の二名へ同時発信のこと。
　aiko.y17@nifty.com　吉中愛子
　oku.masami@coral.plala.or.jp　奥　太雅（雅実）

珈琲ぶれいく ⑥

今回も母音のうちで、私たちが「エ」と発音し、「え」と表記しているものを、昔の人たちは「え」「へ」「ゑ」と書いて、それぞれを区別して発音していました。

「え」にはア行の「え」とヤ行の「え」があります。口語で「エ」と発音されていても、「学校へ」のような場合に使う助詞には、文語表記が残ったまま使われています。

【問】空所に、「え」「へ」「ゑ」のいずれかを入れましょう。

1. 春の水光琳模様（　）がきつつ　上村占魚
2. いにし（　）の硯洗ふや月さしぬ　加藤楸邨
3. 新じやがの（　）くぼ噴井に来て磨く　西東三鬼
4. なつかしき京の底冷（　）覚えつゝ　高浜虚子
5. ロダンの首泰山木は花（　）たり　角川源義
6. 女の香放ちてその名をみな（　）し　稲垣きくの
7. むらさきのこ（　）を山辺に夏燕　飯田蛇笏
8. 大楷をか（　）せば裏は一面火　高野素十
9. 師の齢いくつ越（　）しや芙蓉は実に　石田波郷
10. 淋しきがゆ（　）にまた色草といふ　富安風生

（正解）1. ゑ　2. へ　3. ゑ　4. え　5. え
6. へ　7. ゑ　8. へ　9. え　10. ゑ

「万象」中央句会報

（八月例会に替えて通信句会）43名

内海良太主宰選

暗転の空を一太刀はたた神　大久保　進

スリッパのひつくり返る暑さかな　小池宗彦

水掬ひひらりと返す夏燕　柳澤宗正

初蟬や待ちしこの日の空青し　佐藤晴子

炎天下買物横丁がらんどう　島野ひさ

阿夫利嶺を仰ぐ土塁や祈雨の堀　佐藤嘉洋

ハイカーのひとりおくるる岩清水　田中道江

チエロ背負ふ男の肩の汗の染み　砂地宏子

身幅なる茶室の門や杜鵑草　亀田やす子

鮎の宿みがきこまれし長廊下　小板橋泰山

百日紅開き初めたる我鬼忌かな　飛高隆夫

黒百合やアイヌ乙女の恋哀し　小池宗彦

かたちよきものを見届け袋掛　綱島　清

㊥若き鵜の座は定まれり池の杭　砂地宏子

上野不忍池だろうか、鵜が池の周囲の杭に余さず止まり羽を広げたり休んだりしている。鵜の数ほど無いので、あぶれる鵜もいる。若い鵜がやっと杭を獲得した。やれやれの感がする。

㊥雨足に池の萍踊りをり　大駒泰子

一見平凡に見える句だが、実景に即した作者の昂ぶりが感じられる。最近の雨の降り方は異常。雨に打たれる萍がこんなに踊るように見えたのは初めてだと驚いている。

飛高隆夫選

暗転の空を一太刀はたた神　大久保　進

七変化尽くして終のみどり色　山本とく江

向日葵が目印野菜直売所　砂地宏子

出くはして上目遣ひの蜥蜴の子　柳澤宗正

逆光の窓辺のをんな夏夕べ　中村千久

㊥ゆく夏の沖を見てゐる背中かな　綱島　清

去り行く夏を見送る場所として、たしかに浜辺は相応しい。そして背中には、心のありようが滲み出る。その背中を借りて、作者の夏を惜しむ思いを表現している。

江見悦子選

校庭の白線うすれゆき晩夏　榎本文代

蜑小屋の隅に置かれて水中花　綱島　清

誰も彼も蹴りたくなりて煙茸　内海良太

出くはして上目遣ひの蜥蜴の子　柳澤宗正

かたちよきものを見届け袋掛　綱島　清

㊥棒縞に藍のにほふや汗拭　中村千久

汗拭はハンカチ、夏には欠かせない物。麻か木綿か、藍染の太いたてじまとは何とも粋だ。畳まれていたそれを広げた時に藍が匂ったという。暑さを忘れた瞬間を言い止めた佳句。

山本とく江選

暗雲にかなかなの声湧き上る　奥　太雅

ハイカーのひとりおくるる岩清水　田中道江
青しぐれ音なく濡るる寝釈迦かな　増田幸子
色も香も放つは雄蕊合歓の花　赤堀洋子
出くはして上目遣ひの蜥蜴の子　柳澤宗正
㊥桃届く木にあるごとく息をして　赤堀洋子

一般的に桃は傷み易い物と思いますが、作者は受け取った喜びは然る事ながら、その新鮮さに感銘したのでしょう。「木にあるごとく息をして」の把握・表現に感服しました。

榎本文代選

地下足袋を脱ぎて庭師の三尺寝　杉浦一子
露涼し茶房に銀の忘れ杖　下嶽孝一
沙羅の花遠き山へと雲流れ　小板橋泰山
大甕の床下涼し能舞台　名和政代
また一人寫真の増えて盆供養　山本絢子
㊥生れたての縮みし羽の蟬に雨　大橋雅子

一度だけ蟬の羽化を見たが薄みどり色が印象的だった。ここでは羽を見ている。縮れた羽は少しずつ広がりやがて飛び立つはずである。降りはじめた雨に蟬のいのちを案じている。

吉中愛子選

乱世へアンテナ伸ばせ蝸牛　内海良太
秋近し破堤の跡の癒え難く　大木茂
苔茂る樟の木立となりにけり　柳澤宗正
七夕や遺作の八ヶ岳の絵に替ふる　増田幸子
楠木がうたつてゐるかにみんみん蟬　加賀葉子
㊥夕焼が空の根元に始まれり　田中道江

亀田やす子選

長考の果ての扇子に探究と　綱島清
蜜豆の好きな仏や相伴す　飛高隆夫
向日葵が目印野菜直売所　砂地宏子
遠隔の友の笑顔にビール干す　佐藤嘉洋
夏草の伸び放題や一里塚　杉浦一子
㊥朝顔のむらさき雨の上がりけり　榎本文代

名和政代選

籐椅子や読みかけの本顔に伏せ　小板橋泰山
向日葵が目印野菜直売所　砂地宏子
蜑小屋の隅に置かれて水中花　綱島清
川床に貴船の風や箸休め　大久保進
ゆく夏の沖を見てゐる背中かな　綱島清
㊥大揺れの強き誤報や紅蜀葵　大木茂

大木茂選

堰音や川は二手に梅雨濁　茂木弘子
乳母車に結びて小さき扇風機　榎本文代
拝殿に地酒の届き祭なし　吉中愛子
朝顔のむらさき雨の上がりけり　榎本文代
農道の夕べに匂ふ胡麻の花　名和政代
㊥値札付く犬の甘噛み五月闇　奥太雅

柳澤宗正選

稲の葉を撓め吹かるる青蛙　赤堀洋子
梅雨滂沱赤子は乳房はなざる　村田由美子
校庭の白線うすれゆき晩夏　榎本文代
聞き役の米寿の母や夏座敷　大久保進
かたちよきものを見届け袋掛　綱島清
㊥桃届く木にあるごとく息をして　赤堀洋子

▽中央句会　11月例会　休会（通信句会なし）
▽中央句会　12月例会に替えて通信句会　投句締切11月30日

「万象」同人句会報

（8月例会に替えて通信句会）47名

内海良太主宰選

火葬待つ少年のフォト長崎忌　広瀬俊雄
苔の花溶岩の洞窟エメラルド　竹澤竹里
原爆忌被爆ピアノの響きたり　山本とく江
鉄骨を剥き出すドック稲光　名和政代
酔芙蓉やはらかに刻移りゆく　宮本加津代
五歳児と河童の話茄子の花　南雲秀子
敗戦日ルーペの隅の歪み文字　三屋英俊
大仏の影より生るる萩の風　山本とく江
敗戦忌空は極みの青見する　小林愛子
触れてみて空気のやうなはうき草　古川京子
己が影すつと日傘にたたみけり　宮本加津代
洋菓子の小箱そら色小鳥来る　三屋英俊
浜風にゆらぐ迎へ火能登恋し　佐藤晴子
㊥林道に懸樋の手水秋海棠　佐藤嘉洋

鬱蒼とした林道の水場に、秋海棠の淡い紅色が回りの雰囲気を落ち着かせる。懸樋から落ちる冷たい水に、凸凹なアルミの柄杓とコップが備えてあり、一寸したオアシスとなっている。即物的な句は力強い。

㊥そよそよと粒の数だけ稲の花　竹澤竹里

稲の花は朝の内に見るのがいい。作者は稲田に分け入って稲に顔を近づけるように観察したのだろう。「粒の数だけ」と、青籾の花穂の発見が具体的で分りやすい。粗方は落花してしまうが残った花が風に簪のように揺れるのを見ることもある。

小林愛子副主宰選

法師蟬湯かげんのよき露天風呂　山田春生
秋暑し殻にひび入る茹で卵　榎本文代
袖なしの二の腕にあり今朝の秋　田中道江
母の文読み返しをり盆の月　佐藤晴子
定位置に子規の文机秋に入る　横川良子
朝刊の重き八月十五日　沢辺たけし
㊥八月や南の海に頭垂れ　恒川清爾

八月は日本人にとって重い月である。広島・長崎の原爆忌、そして敗戦忌と続く。作者は南の海に向き、先の戦に散った

数多くの兵士・一般人を偲び無言で頭を垂れた。
終戦日がお盆と重なったため、戦のため命を落とした霊を弔う人々の気持ちはいやが上にも深まるのである。

江見悦子選

残暑なほ路地に水吐く室外機　大久保　進
酔芙蓉やはらかに刻移りゆく　宮本加津代
割箸の脚突つ張つて瓜の馬　中村千久
炎昼のラヂオ八月十五日　島野ひさ
魚群れて向きをひとつに水の秋　宮本加津代
ぞろぞろと宿下りきて揚花火　喜多尾明子
㊥寺町のブーゲンビリア敗戦忌　名和政代

お盆の墓参りだろうか、寺町に南国のブーゲンビリアを見つけた作者。「敗戦忌」の季語が動かない。ブーゲンビリアは美しいが、南方戦線で無残にも散っていった日本兵の姿が重なる。三つの名詞と一つの助詞だけで出来た句であるが、「物」に語らせ、メッセージ性に富み、ゆるがない句となった。

吉中愛子選

弾丸のやうな夕立や御成道　久保村淑子
提灯を吊して終へぬ秋祭　奥　太雅
五歳児と河童の話茄子の花　南雲秀子
鬼やんま翅光らせて水叩く　疋田華子
魚群れて向きをひとつに水の秋　宮本加津代
買ひ足しの晩学ノート法師蟬　大久保　進
㊥敗戦忌空は極みの青見する　小林愛子

三歳の私には八月十五日（敗戦忌）を実感する思い出は微かだが、その後の見聞きした事によって身近に感じる日でもある。見ていると引き込まれそうになる底抜けの空の青さを若者の命と捉えた、実感の籠った句。「極みの青」が切ない。

広瀬俊雄選

真先にマスクを外す残暑かな　赤松郁代
五歳児と河童の話茄子の花　南雲秀子
今日よりは残暑と詠まる酷暑かな　桔梗　純
敗戦日ルーペの隅の歪み文字　三屋英俊
寝ころんで夏百日を自粛中　内海良太
古絵図の城よりこぼれ落ちし紙魚　山本右近
㊥炎昼のラヂオ八月十五日　島野ひさ

八月十五日・紛れもなく戦争に負けた日であるが、終戦の日と呼ばれる事のほうが、最近は多いようだ。この句は、余分なことを言わずに「炎昼のラヂオ」で、あの日の暑さと、天皇の玉音放送を、簡潔かつ的確に捉えている。私は、小学校六年生であったが、あの日のことは鮮明に記憶している。作者の年齢も、あまり違わないだろうと想像される。

沢辺たけし選

秋来ると思へば軽き膝小僧　小林珠江
残暑なほ路地に水吐く室外機　大久保　進
夕焼の余熱をまとふ原爆忌　山本右近
母の文読み返しをり盆の月　佐藤晴子
林道に懸樋の手水秋海棠　佐藤嘉洋

マネキンの昨日に変へて秋を着る　下嶽孝一

㊥鉢植ゑに水たっぷりと原爆忌　榎本文代

何年か前〈八月や六日九日十五日〉という句が注目され話題になったが、この三日があるからこそ日本人にとって八月は特別な月であると言える。「原爆忌」は六日九日となる。原爆を投下された直後の人々の行動は読んだり聞いたりしているが、掲句を見て、今現在の暮しの有難さを感じると共に、被害にあった方々へ思いを馳せた。

山本右近選

街道へ抜ける近道まんだらげ　久留島規子
黙示録読み了ふしじま初の虫　田中幹也
爽やかや読み返したる歎異抄　恒川清爾
八月や傷病兵の手風琴　加賀葉子
魚群れて向きをひとつに水の秋　宮本加津代
晩酌にそへてくれたり衣被　山田春生

㊥マネキンの昨日に変へて秋を着る　下嶽孝一

夏から秋物への展示マネキンの模様替えを詠んだ句。巷はまだまだ残暑厳しいのだが、「昨日に変へて秋を着る」の措辞が、「昨日」と「秋」を対比させることで句に爽涼感を呼んで見事に成功した。コロナ禍の重苦しさが背景にある昨今、こうした爽やかで軽めの句にホッとさせられる。

中村千久選

母の文読み返しをり盆の月　佐藤晴子
己が影すつと日傘にたたみけり　宮本加津代
洋菓子の小箱そら色小鳥来る　三屋英俊
新涼や深夜に門の閉づる音　新妻奎子
古絵図の城よりこぼれ落ちし紙魚　山本右近
餡を煮る篦の丸みや秋彼岸　名和政代

㊥鉢植ゑに水たっぷりと原爆忌　榎本文代

三橋俊雄の句〈あやまちはくりかへします秋の暮〉の下五を「原爆忌」として、今の時代の指導者たちの無知と無定見をはっきり知らしむべきだと思う。原爆忌を詠んだこの句は、広島と長崎で劫火に焼かれ、水を求めながら亡くなっていった犠牲者への挽歌だろう。静かな中に籠められた勁い思い。

三屋英俊選

鉄塔を熔かしてゐたり大西日　中村千久
五歳児と河童の話茄子の花　南雲秀子
袖なしの二の腕にあり今朝の秋　田中道江
みんみんや今日の命を鳴き尽くす　中嶋久登
ひとしきり啼いて軽身の法師蟬　赤松郁代
古絵図の城よりこぼれ落ちし紙魚　山本右近

㊥カンナ燃ゆ鎮魂の鐘海に出づ　田中幹也

長崎忌を想う。カンナは色からも形からも紅蓮の炎を連想させる。作者は理不尽に戦火に逝った人々の無念さや怒りの象徴として、又自分自身の憤りの表象としてこの花を措いた。そして御霊よ安かれと、「鎮魂の鐘」に頭を垂れ慰霊の心を捧げる。精霊達は故郷の空を渡り海の彼方に帰ってゆく。

▽同人句会（11月例会に替えて通信句会）投句締切11月21日

東　西　南　北

消息等

内海良太主宰の句、「くぢら」9月号の「受贈俳誌美術館」に掲載

火の神と疫病神に菖蒲葺く

小林愛子副主宰の句、「俳人協会　俳句文学館」ホームページで紹介　8月23日（処暑の日）の「今日の一句」に次の句が掲載された。

今日処暑の厠の隅を拭きにけり

コメントに「爽やかな季節を呼び込むように」とある。

福島せいぎ顧問の句とエッセイ、「俳句界」9月号特集「宗教と俳句」に掲載

寺　暮　し

戒名に良き字を選ぶ筆始
阿波の空とことん晴れて遍路発つ
布施のため経を読むなと春の雷
涅槃図の月の剥落してゐたる
花御堂つつじのほかはなかりけり
天瓜粉打ちて導師の席にあり
身寄りなき人を葬りし大暑かな
いつせいに熊蟬鳴けり家族葬
学僧でありし青春根深汁
息止めて仏頂の煤払ひけり

エッセイのタイトルは「仏前結婚式」。亡くなったお母さんの供養のためにお寺で結婚式を挙げたい、と訪ねて来た男女に心打たれたせいぎ氏が快諾し、式の戒師を勤めた話が軽妙な筆致でまとめられている。

中鉢弘一さんの句、「鷹」9月号で紹介

桐山太志氏筆「俳壇の諸作」に、次の句と鑑賞文が掲載された。

流氷の白磁一線沖へ来し

「万象」六月号より。北海に臨む町のある朝、前日までの寒濤が静まり、沖一線に流氷が切れ目なく押し寄せていた。接岸までの距離はまだ測りかねるが、早ければ今夜にも港町は流氷に閉じ込められるかもしれない。この句は白磁というたとえが独特だが、海の冷たさに加えて、流氷を浮かび上がらせる晴れ渡った水平線の透明感も伝わり、北海の遅い春の訪れを告げる雄大な景に仕上がっている。

著作紹介

『福島せいぎ百句鑑賞』池田やすし著

福島せいぎさんが主宰を務める「なると」が、創刊四十五周年を迎えた記念として出版された。

著者の池田やすし氏は、「なると」同人、俳人協会会員、徳島ペンクラブ会員。令和元年には「とくしま随筆大賞　優秀賞」を受賞する等、句作のみならず文筆活動にも力を発揮している。

ちょうど、11月の5日は沢木欣一先生の忌日。せいぎさんの第五句集『天蓋』所収の、沢木先生を詠んだ句とその鑑賞文の抜粋を紹介したい。

師と並ぶ写真を飾る冬の卓

師と並ぶ写真を飾る机は、せいぎが気に入って使い込んだ机だろうか。「時の流れ」が静かに語られている。時間が経過しているという事実を、具体的な情景を使って伝える。〈中略〉映像は、攻撃的に過去の記憶を塗りつぶしていくけど、写真は、いったん余韻や背景を考える時間をくれる。もっといえば記憶のフィルムに鮮明に焼き付けるためのツールが俳句だ。言葉がその時代の自分の出来事と重なりあった時、忘れられない記憶が俳句となって心に残る。　（報・江見悦子）

（この線より切り取ってください）

万象作品

令和三年

三　月　号

（十二月十五日締切）

（句の表記は歴史的かなづかいで）

都または市・町・村名	
ふりがな	
姓　号	
年齢	

送り先　〒166－0003　東京都杉並区高円寺南3－52－8　藤田裕子

新規会員を紹介します
姓　　号
郵便番号　〒
住　　所

投句者住所　〒

投句者姓号　　電話

紙上全国俳句大会 投句用紙

※作品集への連続掲載を避けたい方は、用紙をコピーして一組ずつお書きください。

（切取線）

投句締切 12月15日

※投句は一人上限四句（二組）までです

住所
〒
－

（電話　　）

姓　号

宛先　〒277－0027　柏市あかね町24－9　内田郁代

あとがき

▽裏表紙のご案内をお読みください。今年の「万象」では、新型コロナウイルス感染を避けるため、各種大会を中止にせざるを得ませんでした。その代替策として「万象」紙上全国俳句大会を実施することとなりました。投句料無料となったのも、出来るだけ多くの皆様からの投句を期待してのことです。どうぞ、奮ってご応募下さい。（江見）

▽十月に予定していた「万象」全国俳句大会や四月の同人会総会が新型コロナウイルスの影響により中止となり、一堂に会する機会が失われました。しかし、中止の判断は適切であったと思います。（茂）

▽『テルマエ・ロマエ』の作者ヤマザキマリと、脳科学者・中野信子の対談本『パンデミックの文明論』（文春新書）がお薦めです。イタリア人を夫に持つヤマザキさんが、古今東西の感染症への人類の対応を紹介し、中野さんがそれを分析するというもの。日本人とは何かも考えさせられました。（千久）

▽本誌32ページに新同人からのメッセージが掲載されています。今後「万象」の強力な支えとなってくださいます様、ご活躍を期待しています。（規子）

▽昔歌った合唱曲…〈十一月はうらがなし、世界を濡らし雨がふる、十一月にふる雨は、あかつき来れどなほ止まず…〉。今はコロナウイルスの為合唱も自粛。句会も自粛。噫…。（英俊）

▽長年お世話になっていた歯科医院が閉じた。推薦された中から歩いて行ける処を選び、八か月ぶりに検診を受けた。手入れ不足をつくづく自覚。いかにずぼらな生活をしていたか反省中です。（純）

▽全国大会中止により新同人の皆様をお披露目する機会がなくなってしまいました。その為、誌上でのご紹介をみなさまの言葉で掲載しました。

今後の皆様のご活躍を楽しみにしています。（郁代）

会員を募ります

会員は左記の会費（誌代）を前納していただきます。

半年分　六、〇〇〇円
一年分　一二、〇〇〇円

会費の納入は左記の振替をご利用ください。新会員は必ずその旨明記。

郵便振替口座　00230・0・103581
万象俳句会

住所変更等　住所変更、会費納入、退会等については左記にご連絡願います。

〒285・0922
千葉県印旛郡酒々井町中央台1-17-12
竹澤誠治

万象　十一月号
第十九巻　第八号
通巻　第二二四号

令和二年十一月一日　発行

主宰　内海良太
発行人
編集人　江見悦子

〒168-0072
東京都杉並区高井戸東一-三一-六-603
万象発行所
☎〇三-六三二四-五七九六

印刷・有文社（☎042-475-0436）

令和二年「万象」紙上全国俳句大会案内

令和二年度の「万象」の主要各種大会や句会は、感染症の拡大により、中止や延期を余儀なくされています。このため、同人、会員が一堂に会しての研鑽の機会と場が失われ、皆様には残念な思いをされていることと思います。

この度、それ等を補う意味で、「万象」紙上全国俳句大会を実施することといたしました。

新同人はもとより、各支部、各県を挙げて、同人・会員の皆様の参加を期待しております。

投句　当季雑詠　二句一組（十一・十二月号添付の投句用紙を使用）
＊上限を四句（二組）とします。

投句料　無料

締切　令和二年十二月十五日

投句先　〒277-0027　柏市あかね町二十四-九　内田郁代

選者　内海良太主宰・小林愛子副主宰・飛高隆夫万象作品選者・江見悦子編集長
主宰指名の同人、各支部長、代表者

作品集　（選句集）全同人、会員に送付（選者の選評有）
＊「万象」誌三月号と同送する予定です。

賞品　主宰・副主宰特選に色紙・短冊を贈呈

令和二年「万象」紙上全国俳句大会委員長　内海良太
実行委員長　江見悦子
事務局長　内田郁代